

2023 年度
学生奨学海外研修

＜研修レポート集＞

International Exchange Program
2023



明海大学 歯学部
Meikai University School of Dentistry

明海大学歯学部 2023 年度学生奨学海外研修参加者一覧

研 修 先	教員/学生	氏 名
カリフォルニア大学 ロサンゼルス校 8月2日(水)～8月11日(金) (10日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	坂 東 康 彦
	学生 5 名	福 井 僚 太 町 田 優 花 水 上 拓 紀 八 重 榎 怜 山 崎 盛 光
テキサス大学サンアントニオ校 8月18日(金)～8月28日(月) (11日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	溝 口 尚 子
	学生 5 名	清 岡 昂 弘 常 木 麻 衣 寶 諸 知 史 宮 定 雄 一 森 田 麻 莉
アラバマ大学バーミングハム校 8月21日(月)～8月30日(水) (11日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	岡 本 和 彦
	学生 5 名	池 田 千 敏 菊 池 俊 汰 千 葉 萌 子 仲 俣 光 記 吉 田 昭 花
タフツ大学 2024年3月11日(月)～3月16日(土) (6日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	羽 田 詩 子 (朝 日 大 学 教 員)
	学生 2 名	久 保 田 拓 人 松 木 ひ な の
メキシコ州立自治大学 8月9日(水)～8月18日(金) (10日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	村 上 幸 生
	学生 5 名	荒 井 美 羽 猪 俣 直 希 河 野 圭 介 深 江 圭 諒 本 田 莉 子
北京大学口腔医学院 8月13日(日)～8月20日(日) (8日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	山 本 信 治
	学生 5 名	土 屋 萌 長 塩 佳 濱 崎 央 山 田 大 吉 田 希 瑞
空軍軍医大学口腔医学院 8月20日(日)～8月27日(日) (8日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	佐 藤 慶 太 郎
	学生 5 名	宇 津 木 真 凜 中 里 恵 野 原 み ぎ 三 谷 和 ぶ 柳 町 可 奈 斗
トゥルク大学 8月18日(金)～8月25日(金) (8日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	小 林 真 彦
	学生 2 名	梅 崎 あ り 葛 山 美 優 さ 花
シエナ大学 2024年3月17日(日)～3月24日(日) (8日間)	ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ	岸 本 敏 幸 (朝 日 大 学 教 員)
	学生 2 名	熊 耳 優 佳 里 竹 澤 直 龍

カリフォルニア大学ロサンゼルス校

2023 年 8 月 2 日（水）～8 月 11 日（金）（10 日間）

インストラクター 坂 東 康 彦 准教授（組織学分野）

学 生 福 井 僚 太 町 田 優 花 水 上 拓 紀

八重樫 怜 山 崎 盛 光



1 カリフォルニア大学ロサンゼルス校

University of California, Los Angeles

(1) インストラクター

坂東 康彦（形態機能成育学講座 組織学分野 准教授）

「UCLA で感じた医療に対する共通の思い」

UCLA では、立地するロサンゼルスという都市の特徴と同様、様々なルーツ、言語、価値観を持った方々が英語を共通語としてまとまっている。医療従事者、患者双方が多様な価値観を持っているため、医療において求められるのが日本とは少し異なるかもしれない。しかし医療の根本になっているのは、患者各々に応じた希望を実現するためにベストを尽くすという、日本と変わらない医療従事者の思いであることを今回の研修で実感した。

ロサンゼルス空港に到着して間もなく UCLA の学生メンバーの手厚い歓迎を受け、Krebsbach 歯学部長をはじめ UCLA の関係者の待つウェルカムディナーで相互学生とインストラクターの自己紹介を行い、すぐに打ち解けることができた。今回の研修に参加した UCLA の学生達には、同じ目標を持つ明海・朝日の学生をすぐに受け入れて頂き、研修期間を通じて最高のもてなしをして頂いたと実感している。学生達も、UCLA の学生達に積極的に英語で話しかけ、コミュニケーションを通じて様々な価値観を学んだはずである。歯学部長には改めて面談の時間を設けて頂き、歓談することが出来た。

研修期間中には Dr. Henry Takei をはじめとして、8名の UCLA の先生方の講義を受講する機会を得た。臨床、教育、研究と、様々な内容で講義をして頂いた。特に診療に関しては保健医療制度や手法に日本とは異なる部分もあり、学ぶことが多かったはずである。学生たちは積極的に英語で質問を行って講義に参加し、充実した時間を過ごした。各先生方の講義からはハイレベルな技能と技術はもちろんであるが、共通して伝わってきたのは、患者一人一人の希望の実現に向けた情熱で、そこから学ぶことも多かった。Takei 先生が、歯周外科治療やインプラントの埋入以前のプラーク除去と患者教育による歯周病予防の重要性を強く語っていらしかったのが印象的であった。

また我々は Dr. Henry H. Takei Endowed Periodontal Symposium に参加する機会を得た。Takei 先生の功績の御紹介があった後、Dr. Istvan Urban の骨再生療法に関する講演を拝聴

した。学生達は最先端の歯周病治療に大いに刺激を受け、私も組織学の教員として大いに学ぶことがあったが、高度な技術だけではなく患者の健康を取り戻すための熱意が伝わってくる講演であった。

最終日には Torrance にある Dr. Steven and Michelle Okamoto クリニックの見学の機会を得た。大学とは違うクリニックでの診療にも触れ、さらに視野が広がったと思う。Michelle Okamoto 先生は UCLA 歯学部在学中 2012 年度の本研修プログラムに参加されていて、アメリカの歯科診療のお話のほか、プログラム参加当時のお話も皆で興味深く聞かせて頂いた。

今回の研修は学生が皆積極的に参加し、UCLA の先生方やホスト学生をはじめとする多様な価値観を持った方々との交流を通じて、国際的な視野が広がったことを実感していて、インストラクターとしてサポートできたことを嬉しく感じる。今回の経験が参加学生にとって国際性を修得するきっかけになり、海外で活躍することが彼らの選択肢の一つになることを期待する。

私自身も多くの人との交流を通じて、持っている価値観やバックグラウンドは多様でも患者さんのためにベストを尽くしたいという医療従事者の思いの上に歯科医療が成り立っていることは日本と共通であることを実感した。今回の貴重な体験から得たことや感じたことを今後明海大学の一員として後輩に伝え、学生指導に活かしていきたい。

最後になりますが、貴重な機会を与えて頂きました宮田淳理事長をはじめとする明海・朝日大学関係者の皆様と UCLA の関係者の方々に深く御礼を申し上げます。



(2) 学 生 5 名

① 福井 僚太

「人生初の海外へ」

入学当初から目標としていた、10 日間の奨学海外研修に参加し、講義や施設見学、現地視察など、日本では得難い経験に加え、かけがえのない友人を得ることができました。今回の研修は、私にとって人生で初めての海外渡航でした。英語でのコミュニケーションが通じるのか、入国審査は無事に通過できるのかなど、不安を抱えながらの出発でした。

ロサンゼルス空港に到着し、いよいよ入国審査へ。いくつか簡単な質問を受けた後、「どこに行くのか」と尋ねられ、「UCLA です」と答えると、審査官はそれまでの厳しい表情から一変して笑顔に。「何を学んでいるの？楽しんできて」と温かく送り出してくれました。空港の出口では、UCLA の学生たちが私たちの名前が書かれたボードを持ち、大きな声で出迎えてくれました。ゆっくりと話しかけ、拙い英語にも熱心に耳を傾けてくれる彼らの姿勢に、不安は一気に吹き飛びました。

現地では、歯学部の方による講義を受ける機会があり、どれも興味深く、大きな刺激を受けました。また、口腔内スキャナーや齲蝕除去、インプラント埋入などの臨床を想定したシミュレーター実習では、手に伝わるリアルな感覚を体験し、非常に貴重な学びとなりました。

なかでも印象的だったのは、歯周病科の Hamada 先生による講義です。内容は歯科の専門知識ではなく、「これからの人生をどう生きるか」というテーマでした。先生は、ご自身の一見脈絡のないキャリアが、実はすべてアメリカでの活動を見据えて計画されたものだったと語り、「60 歳になったとき、どうなっていたい？」という問いを投げかけられました。私は答えに詰まり、将来の自分像を描ききれていないことに気づかされました。登山に例え、「山頂＝目標」がなければ、今なにをすべきかも定まらない、という言葉が胸に残りました。UCLA の学生たちが、自らの将来像を具体的に語っている姿を見ても、考えさせられることが多くありました。

また、ホストの学生たちは、自分の患者を抱え日々多忙であるにもかかわらず、ロサンゼルス市内を案内してくれたり、昼食を共にしたりと、多くの交流の機会をつくってくれました。彼らの心配りと温かさには、感謝の気持ちでいっぱいです。UCLA では、学生自らが患者の予約管理を行い、学年を超えたチームで治療計画を立てて診療を進め、卒業にあたっては

高度な臨床技術を要する症例もこなさなければならないなど、日本の教育システムとの違いも肌で感じることができました。

観光では、野球の試合観戦やベニスビーチ、グリフィス天文台などを訪れ、スポーツに熱狂する文化や、言葉では表現しきれないような壮大な景色に心を奪われました。

この 10 日間の海外研修を通して、自らの視野が大きく広がり、自分の進むべき道を見つめ直す貴重な機会となりました。このプログラムがなければ、ホスト学生との交流も、日本との違いを「自分の目で見て体験する」こともなかったと思います。まさに「百聞は一見に如かず」。これから参加を考えている方にも、不安はあるかもしれませんが、それ以上の経験と学びが待っています。ぜひ、一步踏み出してみてください。



② 町田 優花

「一生の思い出」

私が明海大学歯学部を志望した理由の一つは、この「海外研修制度」の存在でした。念願が叶い、このプログラムに参加できたことを大変嬉しく思います。

私はアメリカへ行くのが初めてであり、長時間の飛行機移動や時差ボケ、そして明海大学メンバー5人のうち女子は私1人だけであることなど、不安な要素がたくさんありました。

しかし、UCLA で過ごした 10 日間は、そのような不安を感じさせないほど充実しており、私の人生において最も大きな経験のひとつとなりました。

UCLA のキャンパスは、明海大学とは比べものにならないほど広大で、その壮大さと建築の美しさに圧倒されました。キャンパスツアーに参加しましたが、あまりの広さに歩き疲れたことを覚えています。体育館やグラウンドも、まるで専門施設のように立派で充実していました。

UCLA の大学病院は、日本の大学病院とは造りが少し異なっていました。まず、1フロアあたりのチェアの数日本よりはるかに多く、患者さん同士の距離は近いものの、しっかりとしたパーテーションで区切られ、各ユニットが完全な個室のような空間になっていました。また、UCLA では学生が自ら患者さんを担当し、1人の患者さんに対して3時間もの治療を行います。日本では1人にそこまで長時間の治療を行うことは少ないため、大変驚きました。長時間治療を行うため、1日に診る患者さんの数は少なくなりますが、そのぶんど寧かつ正確に治療ができる点に感銘を受けました。さらに、患者さんと学生とのやり取りは日本よりも親しみやすく、アットホームな雰囲気であることも印象的でした。

授業は主に英語で行われ、不安もありましたが、図や動画、ジェスチャーなどを活用しながら、先生方がとてもわかりやすく講義してくださったおかげで、大変有意義な時間を過ごすことができました。中でも特に印象に残っているのは、Ms. Tomomi Baba による顎顔面補綴学の授業です。彼女は、がんによって目や鼻などを失った患者さんにエピテーゼを製作する技工士です。Ms. Baba は、英語がまだ分からなかった頃、言葉では通じ合えなくても、患者さんの目や表情を丁寧に観察し、心情を読み取る努力をしていたと語ってくださいました。日本語が通じる患者さんであっても、言葉に頼るだけでなく、細やかな表情や動作から気持ちをくみ取る姿勢が大切だということを、改めて実感しました。私も、患者さんに寄り添え

る歯科医師になりたいと強く思いました。

キャンパス外でも多くの場所へ連れて行っていただきました。美しかったサンタモニカビーチ、かねてから行って見たかったユニバーサルスタジオやハリウッド、そして人生初の野球観戦（しかもドジャース戦）など、ロサンゼルス存分に堪能できました。

そして、忘れられないのが UCLA の学生たちの優しさです。このプログラムでは、明海大学の学生一人ひとりに UCLA の学生バディがつきます。LA に到着するまでは、自分のバディと仲良くなれるかどうか不安でしたが、それはまったくの杞憂でした。研修期間中はたくさん会話を重ね、共に過ごす時間の中で交流を深めることができました。LA を離れるときは本当に寂しかったです。研修中に少し体調を崩してしまったのですが、バディが非常に気遣ってくれ、のど飴やビタミン剤などを持ってきてくれました。バディの存在は本当に大きな支えでした。また、バディ以外の多くの UCLA の学生とも仲良くなることができ、新しい土地に友人ができたことをとても嬉しく思います。

念願だった UCLA での海外研修に参加できたことは、私の人生において極めて貴重で、大きな経験となりました。このプログラムに関わってくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。





③ 水上 拓紀

「アメリカの歯科治療と UCLA の学生」

今回、カリフォルニア大学ロサンゼルス校での研修の機会をいただきとても感謝するとともに私はこの研修をととても楽しみにしていました。なぜなら海外で歯科を学び、現地の学生や先生方から直接お話を聞くことは滅多にないからです。また私は海外渡航の経験がなく、海外の生活や社会、文化に直接触れたいとかねがね思っていました。

私は今回の 8 月 2 日から 8 月 11 日の 10 日間の研修で大きく二つのことを学びました。

まずはアメリカの歯科治療についてです。アメリカと日本で大きく異なることは国民皆保険がアメリカには存在せず、国民の半数は民間の医療保険に加入しています。医療保険により被保険者の医療費の負担額は異なるため個人の経済状況により選択する治療も異なります。特に補綴治療では使用する材料により大きく治療に関する価格が異なるため患者への説明と契約が大事になると聞きました。これは日本の自由診療の際にも大事であると思いました。日本では保険診療と自費診療が混在しています。患者はどこまでが保険でどこから自費なのかが分かりにくいのではと思っていました。トラブルの回避のためにわかりやすい説明をするとともに患者自身が選択した治療であると明確に示す契約書等でより患者の納得を得やすいよう工夫をすることが必要であると考えます。契約書などの法律に関わることは勉強不足であるため臨床に出たタイミングで勉強をしたいと思います。

次に今回交流をしたカリフォルニア大学ロサンゼルス校の学生についてです。彼ら大学卒業後のデンタルスクールの 3 年生です。私たちと大きく異なる点は学生の中から患者を持っていることです。グループで 60 人近い患者を持ち、個人では 20 人程度の患者を持ち、治療にあたっていると聞きました。私が特に驚いたのは学生が患者とメールや電話で直接連絡を取り合い、治療のアポイントを調整していたことです。彼らは大学での授業と治療を両立し、知識とスキルを高めていました。私たち日本の学生が患者と接するのは臨床実習中のみであり、治療への参加もアシスト程度です。

また、交流をした学生から感じたのは、人間性の高さです。彼らは一度大学を卒業しており、そのためか私たちよりも社会や経済などの歯科以外の知識にも長けていました。私にロサンゼルスではホームレスの増加や物価の上昇が問題となっていると教えてくれました。私も日本の経済とそれを取り巻く問題についてくらは基本知識として学ぼうと思いました。

そして、心理的な面でも彼らは優れていました。私自身英語が得意ではなく、会話が理解できないことがありました。その際はそれを察知し、スマホで翻訳をしたり、画像で見せられたりと常に私たちに気を配っていました。人間性の高さとの視点を持つことから実際に治療を行っている学生との差を感じました。

さらに、自分自身から学ぼうとする姿勢と先生と学生の距離の近さに驚かされました。ユニバーサルスタジオでも学びがありました。UCLA の学生が同行した小児歯科の教授に対し、デンタルや口腔写真を見せ、治療に関するアドバイスなどをもらっていました。遊ぶ時は遊び、チャンスがあれば自ら学ぶという彼らの姿勢に私は良い刺激を受けました。

私は補綴科とインプラントに興味があります。口腔インプラント以外に顔面部のインプラントが存在し、その手術風景を学生から写真で見せていただきました。またエピテーゼの制作に関する授業を受け、興味は口腔インプラントから顔面部のインプラントにまで広がりました。

今回の研修で得た知識と現地の学生から得た刺激を活かし、積極的に学び、自身の知識を広げ、深めたいと思います。今回このような機会をいただきありがとうございました。





④ 八重樫 怜

「異言語文化交流におけるコミュニケーション」

日本語が通じない場所でのコミュニケーションって、やっぱり難しい！おそらく多くの人が異言語文化圏で言葉を交わそうとすると、そう感じるのではないのでしょうか。実際、私も今回 UCLA を訪れ、どのようにコミュニケーションをとっていくか、大いに苦心しました。ああすれば伝わるかな、こうすればいいかなと、試行錯誤を重ねながら工夫を凝らしました。今回私は、その中でどのようにコミュニケーションを築いていったのかを、ここでご報告したいと思います。これから UCLA、ひいてはアメリカに行く後輩たちにとって、少しでも参考になれば幸いです。

まず、今回の研修で学んだことの一つ目は、「言葉が通じなくても、なんとかなる」ということです。実のところ、私の英語力は「I have a pen」レベルで、ペラペラ話すことなんて到底できません。でも、それでも本当になんとかあったのです。たとえば、ボディラングージの活用です。意外にも、ジェスチャーで伝えられることはたくさんあります。UCLA のバディや先生方との会話では、「大きい」「1」「楽しい」といった簡単な言葉も、身体表現を交えることで、より明確に、そして相手に伝わりやすくなりました。

また、スマートフォンの翻訳機能を使えば、自分の伝えたいことを簡単に表現することもできます。ただし、これは本当に最終手段にするべきだと感じました。なぜなら、翻訳機能を使うためにスマホを取り出して文字を入力している間に、会話のテンポが乱れ、変な間ができてしまうからです。実際に私も、バディの Chelsea との会話で、単語の意味が分からなかったり、どのように伝えればよいのか分からなかったりして、何度も翻訳機能を頼りました。そのたびに会話が途切れ、気まずい雰囲気になることもありました。

そんなとき、水上君のバディである Lester が「ゆっくりでいいから、自分の言葉で伝えてみて」と言ってくれたのです。この一言に、私はハッとさせられました。私がしていたのは、ただ正しく言葉を伝えようとしていただけで、真の意味での「コミュニケーション」ではなかったのだと気づかされたのです。今思えば、細かな部分で私はきちんとコミュニケーションが取れていなかったのだと感じます。

たとえば、UCLA では毎朝、皆で集まりバディと一緒に食事をするのですが、その際、バディたちは笑顔で挨拶をしてくれていました。普段、自分がどんな表情で挨拶しているかは分

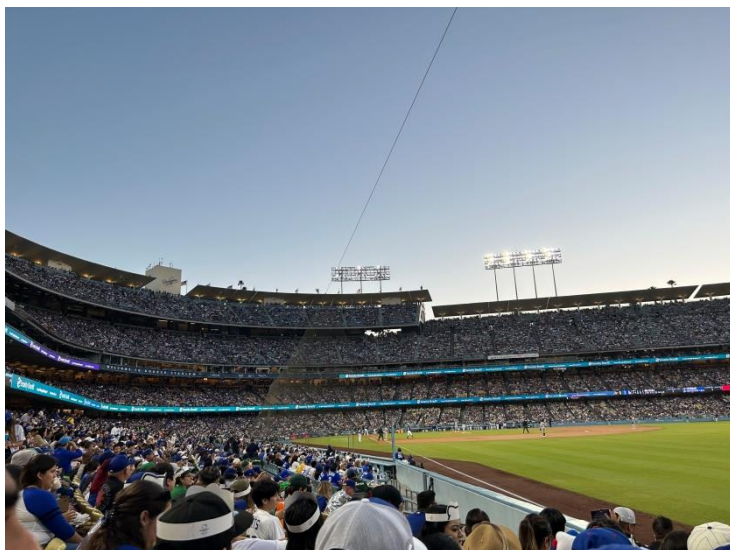
かりませんが、「おはよう」と声をかけられるとき、真顔で言われるのと笑顔で言われるのとでは、受ける印象がまるで違うということを心から実感しました。コミュニケーションとは、言葉が通じれば成り立つものではなく、「相手を理解しようとする気持ち」で成り立つのだと、改めて痛感しました。

学んだことの二つ目は、「将来の可能性は多種多様に存在する」ということです。皆さんには、もう将来像がありますか？いきなりそう聞かれて即答できる人は、かなり少ないと思います。「海賊王に俺はなる！」と言える人がいたら、むしろかっこいいと思いますが、かく言う私も、まだ明確な将来像はありません。ただ、今回の研修を通じて、将来の選択肢が増えたという実感があります。

たとえば、アメリカでは切削はできなくても、充填を行うことができる資格が存在したり、歯科技工士が印象採得を行う場合もあるそうです。すべては資格や技術の裏付けが必要ですが、歯科医師になることだけがゴールではなく、「自分らしく生きるための選択肢」はいくらでもあるのだと強く感じました。

今回の研修では、顎顔面補綴を行う UCLA の技工士さんが、舌がんで顔の大半を失った患者さんの「スカイダイビングをしたい」という夢を叶えるために尽力した動画を拝見しました。そこには、患者さんはもちろん、関係者の皆さんも生き生きと映っていて、その光景がとても印象的でした。私の語彙ではうまく表現しきれないのがもどかしいのですが、それでも「本当にかっこよかった」とだけ、ここではお伝えしておきます。

最後に改めて、このような貴重な機会を与えてくださった明海大学の関係者の皆様、一緒に学びを深めた朝日大学の関係者の皆様、そして共に渡航した素晴らしい仲間たちに、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。





⑤ 山崎 盛光

「日本アメリカ間の歯科に関する相違点及び歯科に影響を及ぼす背景因子について学んだこと」

はじめに、歯科大学に関する相違点について述べる。日本では、一般的に高等学校卒業後に歯科大学へ進学し、6年間の課程を経て歯科医師国家試験に合格することで歯科医師となる。一方、アメリカでは高等学校卒業後、まず一般大学へ入学・卒業した後に歯科大学へ進学し、4年間の課程を経て歯科医師となる。すなわち、アメリカでは歯科医師になるまでに、大学生として計8年間を過ごすことになる。

また、日本では歯科医師免許取得後に研修医として初めて主体的に患者さんの治療にあたるのが一般的であり、学生のうちは見学やアシスタントが主となる。一方アメリカでは、歯学部3年次または4年次から実際に患者さんに対する治療を行う。学校によって多少の違いはあるかもしれないが、私が研修を行ったカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）では、このようなカリキュラムが採用されていた。ただし、実際の治療に入る前に、模型を用いた十分な模擬実習を行う点は、日本と同様である。

次に、歯科医療全般における相違点について述べる。まず時間的な点について、日本では一般的に1人の患者さんに対し30分から1時間の間隔で次々と診療を行うが、アメリカでは午前に1～2人、午後に1～2人というペースで、1人の患者さんにかかる時間が比較的長い。歯科治療においてスピードも重要だが、アメリカではそれ以上に患者さんとのコミュニケーションを重視しているという。日本でもコミュニケーションの重要性は認識されているが、診療報酬制度など経済的な制約により、十分な時間を確保することが難しい現状がある。

治療そのものに関しては、日本と大きな違いは感じられなかった。つまり、残存歯を健康に保ち、口腔内環境を良好に維持するための適切な口腔清掃指導や、食生活など日常習慣に課題がある場合の生活指導がまず重要であり、そのうえで、う蝕や歯周疾患が生じた場合には最小限の侵襲で治療を行い、元の組織をできる限り保存するという点である。これらは日本における歯科治療方針と共通している。

今回の研修では、世界的に著名な Henry H. Takei 先生の講義を受ける機会があり、その中で「歯周疾患を防ぐには、何よりも適切なブラッシングが重要であり、それさえできていれば歯が抜けたり、義歯やインプラントに頼ることはない」と繰り返し強調されていた。それほど一次予防の意義は大きいということだ。

続いて、アメリカにおける歯科医療に影響を与える背景因子について述べる。代表的な例が歯科治療費の違いである。日本では国民皆保険制度があるため、保険診療であれば高額な費用が発生することは少なく、経済的な理由で通院をためらうことは基本的にない。そのため、日本では痛みなどの症状が出てから歯科医院を受診する傾向がある。

一方、アメリカには皆保険制度がなく、各自が民間の任意保険に加入したうえで歯科診療を受けることが一般的である。しかし、そもそもの治療費が日本の約3倍から、場合によっては15倍ほど高額である。そのため、保険に加入していても治療費は高額になりやすく、人々の予防意識が非常に高い。多くの人が定期検診や歯科クリーニングを受けているのが現状である。

また、食生活の影響も無視できない。アメリカでは私たち日本人がイメージするような高カロリー・高糖質・高塩分の食事が日常的に摂取されており、全身疾患のみならず歯科疾患にもなりやすい環境にある。小児歯科の Ramos-Gomez 先生の講義では、「市販されているお菓子やジュース類は糖分が多すぎて、子どもにとっては毒のようなものだ」と表現されていたほどである。我々大人も、同様に注意が必要だと強く感じた。

最後に、現地で私たちを受け入れてくださったホストをはじめ、関係者の皆さまが非常に親切で温かく迎えてくださったことに、心より感謝申し上げたい。





テキサス大学サンアントニオ校

2023年8月18日（金）～8月28日（月）（11日間）

インストラクター 溝口 尚子 講師（生理学分野）

学 生 清岡 昂 弘 常 木 麻 衣 寶 諸 知 史

宮 定 雄 一 森 田 麻 莉



2 テキサス大学サンアントニオ校

The University of Texas, Health Science Center at San Antonio

(1) インストラクター

溝口 尚子 (形態機能成育学講座 生理学分野 講師)

「テキサス大学サンアントニオ校での眩しい笑顔」

米国テキサス州中南部にあるサンアントニオ空港に到着した飛行機から一步踏み出すと、日本とは異なる、湿気は少ないが夜になっても消えない熱気を感じました。そして昼は鋭い日差しの中、2023 年度テキサス大学サンアントニオ校への奨学海外研修は、フライトを含めて 11 日間の日程で行われました。朝日大学と明海大学から学生各 5 名、引率各 1 名の計 12 名で臨みました。

夜のサンアントニオ空港に到着すると、中心となって研修をリードしてくださる Dr. Scott が笑顔で出迎えてくださいました。その後、宿泊先ホテルでは 2 年生と 4 年生（米国では最上級生）の学生ホストが総勢 24 名（！）で日本からの学生を囲んで Welcome Party をしてくれました。

研修では最初に、基礎研究分野を束ねる Dr. Brij Singh の研究室を見学しました。組織の培養設備や電気生理学的研究を行う装置が並び、三叉神経関連の研究について説明を受ける機会も得ました。ラボ内では唾液腺細胞の初代培養をしている最中でもあったため、学生と一緒に実態顕微鏡で観察させていただくこともできました。今回の参加者は 5 年生でしたので、久しぶりに基礎分野に触れる良い機会にもなったかと思います。続いて Dr. Anne Jones の病理学研究室を見学しました。予め特製パンフレットを準備してくださっていた上、教授自らが熱心に研究室ツアーをしてくださいました。病理診断は年間 3,500 件にも及ぶため、検体の保管から X 線などの関連画像や文書の統括管理、切片標本を作成し診断、そして診断結果を最終確認するにいたる過程ごとに部屋とスタッフを分けて効率的に運営しているとのこと。なお学生は 1 年生から 3 年間、病理学を学ぶようカリキュラムが組まれているそうです。それを聞いたときには学生と共に驚き、日本との違いに思いを巡らせました。

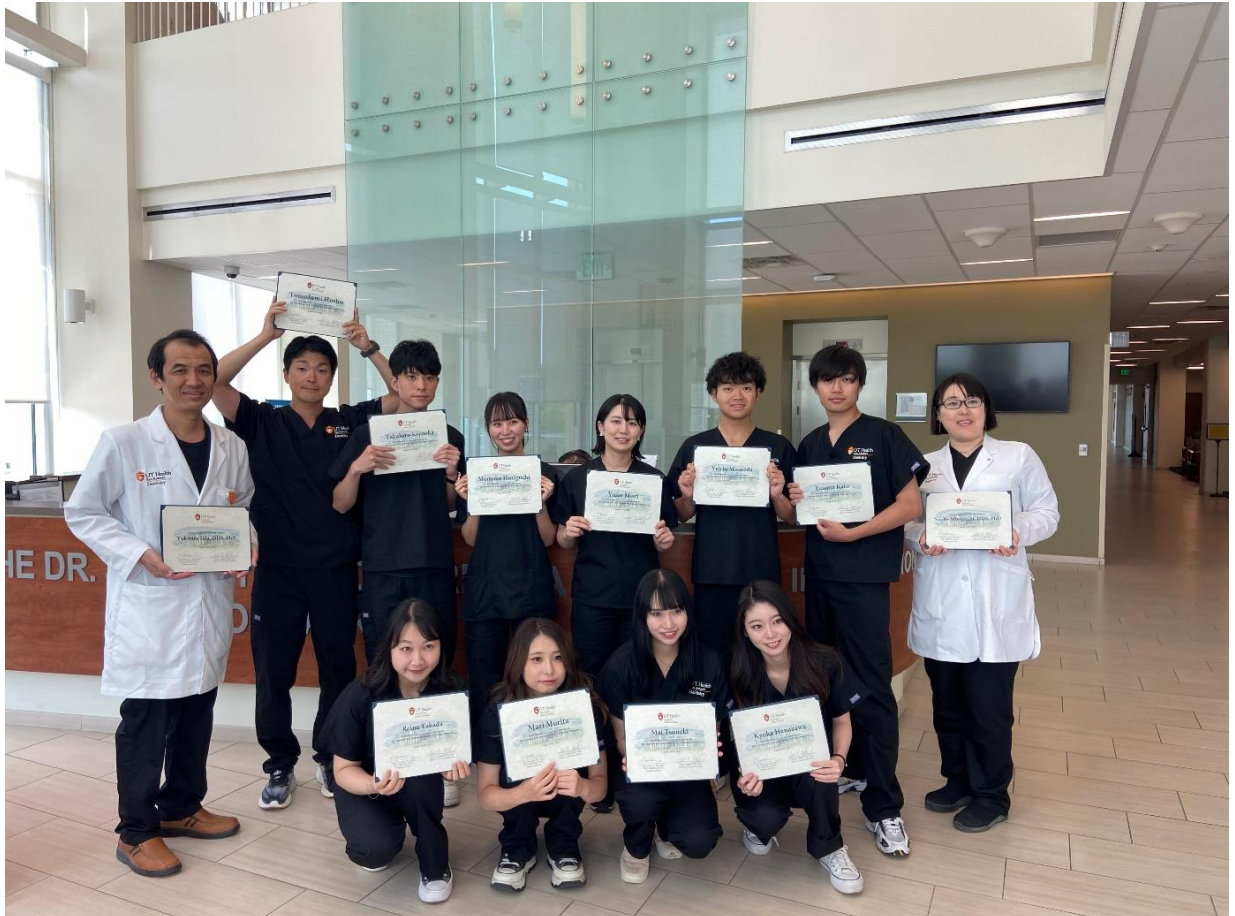
歯学部 の 病院棟 は、1 階と 2 階は専門領域、3 階と 4 階は院内実習用としてフロアが分かれていました。ひととおり見学した後、学生たちはテキサス大のメンバーと同じ臨床着を着

て、4年生が自分で診療を行う臨床実習のアシストをしながら、様々なことを感じ学び取っていました。日本企業の歯科材料も多く使われていることへの親しみを感じる一方で、学生による口腔内スキャンや3Dプリンタの使用がごく当たり前に行われている様子に驚きました。本プログラムに学生として参加した経験のある Traci Cowan 助教による臨床教育を見学することもできました。彼女はこのプログラムに参加したことがとても良い経験となっていたと言っていました。別の時間には、場所を変えて2年生と共に模型を使った窩洞形成の実習をしました。模型実習の時から拡大鏡を装着しているそうで、本学の学生も借りて試していました。慣れるまで試行錯誤が必要とのことでしたが、視野の関係で自然と背筋が伸び洗練された診療姿勢に役立っているように見えました。実習中の学生の姿、表情は皆真剣そのもので、研修期間中、最も眩しい笑顔があふれていました。

研修の合間には地域の文化に触れる経験をしました。州議事堂視察に同行したテキサス大の学生が、移動中のバスでは楽しく笑っていたのとは打って変わって真剣に見学する様子に、本学学生が感心するといった場面もありました。そして、全体を通してここでは書ききれないほどの歓迎を受け、テキサス大学サンアントニオ校の教員と学生の皆様には感謝の気持ちで一杯です。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださり、またさまざまな点からサポートしてくださいました関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。





(2) 学 生 5 名

① 清岡 昂弘

「テキサスでの思い出」

テキサス大学サンアントニオ校での 11 日間の研修は、一生忘れられない思い出となりました。まず初めに、英語をうまく話せるかどうか非常に不安でしたが、ジェスチャーや翻訳アプリを必要に応じて活用することで、言語の壁に悩まされることは思っていたほど多くはありませんでした。テキサスの学生がとてもフレンドリーだったこともあり、学生同士の会話には大きな困難は感じませんでした。

テキサスではさまざまなことを学びました。まず印象的だったのは、アメリカの歯科事情についてです。アメリカの歯科大学は日本と異なり 4 年制であり、入学には歯科とは関係のない別の 4 年制大学を卒業する必要があることを初めて知りました。また、アメリカでは 3 年生から一人で診断から治療まで行っていることに大変驚きました。さらに、レントゲン撮影の際に日本のような扉付きの部屋ではなく、扉がないまま撮影していることや、器具を使用する際には窓口まで借りに行くというシステムにも驚かされました。

実際に 4 年生のホスト学生による診療の様子を見学する機会がありました。カルテや歯科用語はすべて英語なので理解は難しかったものの、診療内容そのものは日本とほとんど変わらなかったため、「今どのような処置をしているのか」を自分なりに考える力が養われた気がします。もちろん、ホストの学生がわかりやすく説明してくれたので、困ることはありませんでした。普段日本語で学んでいることを英語で学ぶというのは不思議な感覚でしたが、とても良い経験となりました。自分と同じ「学生」が実際に患者さんの治療をしている姿を見て、大いに刺激を受け、帰国後はさらに努力しようという意欲が湧きました。

次に印象に残っているのは、テキサスの食生活です。テキサスはイメージ通り、ボリュームがあり重めの食事が多く、ピザやハンバーガー、そしてメキシコに近いこともありタコスがメインでした。しかし意外にも寿司やラーメンを食べることができ、量の多さを除けば困ることはありませんでした。現地の人が寿司やラーメンを食べるときに箸を普通に使っていたことには驚かされました。

大学訪問日以外のプログラムでは、カウボーイハットを被っての乗馬体験や、カウボーイが行う投げ縄体験、プールでの遊泳、アラモ砦という歴史的観光地への訪問、ロデオ鑑賞、

ダンス、ショッピング、ホストの家への訪問、さらにはテキサラ工場やワイン工場の見学など、多彩な活動を体験しました。中でも乗馬を含むカウボーイ体験は、日常では味わえない特別な体験であり、日本ではなかなかできない非常に貴重なものでした。

テキサス滞在中は空き時間がほとんどないほど充実したプログラムが組まれており、11 日間がまるで一瞬のように感じられました。最終日には盛大なお別れ会を開いていただき、別れ際にホスト学生が「いつでもテキサスに来てね」と言ってくれたときには、思わず涙が出そうになりました。

この研修では、普段できない経験を数多くし、多くの学びを得ることができました。そして、同じ夢を志す仲間に出会い、ともに過ごした 11 日間は一生の宝物です。ホスト学生とは研修後も連絡を取り合っています。このような素晴らしい交流の機会を得られたことに、心から感謝しています。この経験を無駄にすることなく、努力を重ねて立派な歯科医師になりたいと強く思っています。



② 常木 麻衣

[テキサスでの出会いと喜び]

テキサスでの海外研修を終え、自分自身の中で多くの成長を実感することができました。私は明海大学に入学する前から海外研修に行きたいと考えていたので、ひとつでも多くのことを学び、吸収しようという気持ちで研修に臨みました。

今振り返ると、研修期間中はスケジュールも体力的にも非常にハードでした。また、何よりもホストに自分の言いたいことがうまく伝えられないもどかしさや不安もありましたが、そんな私たちをホストの学生たちは常に気にかけてくれました。言葉がうまく伝わらないからこそ、表情やジェスチャーを使って必死に寄り添ってくれる姿に、何度も励まされました。みんながお互いに「伝えよう」「理解しよう」と英語や日本語を毎日少しずつ教え合い、深い信頼関係を築くことができました。

研修は、羽田空港近くで前泊し、朝日大学の学生や引率の先生方と親睦を深めることから始まりました。翌日、羽田空港から約 16 時間のフライトを経てテキサスに到着しました。夜遅くホテルに着いたにもかかわらず、4年生と2年生のホスト全員が温かく出迎えてくれ、胸がいっぱいになったのを今でも覚えています。皆がとてもフレンドリーで、初日から家族や友人、趣味やプライベートな話までたくさん語り合いました。

病院見学では、多くの発見と学びがありました。まず一番驚いたのは設備です。各ユニットにパソコンが設置されており、カルテ情報やパノラマ画像を大きな画面ですぐに確認でき、照明も非常に大きかったです。また、デンタル撮影にすぐ対応できるようにユニット横の棚に器具が収納されており、日本の病院では見たことのない配置でした。もちろん、メリット・デメリットの両方が考えられますが、自分の中で視野が広がり、とてもワクワクしました。

病院見学の後には、4年生のホストが行う治療の見学も行いました。自分がもしこの立場に立ったら何ができるだろう、自分だったらどのように治療を進めるかなど、さまざまな思いを巡らせましたが、現時点の自分では知識も技術もまだまだで、もっと精進しなければならぬと痛感しました。

そのほかにも、全員でさまざまな場所へ観光に行き、初めての経験がたくさんありました。ウォッカ工場、ワイン工場、州会議事堂、リバーウォーク、ロデオ、乗馬体験など、それぞれの場所での一瞬一瞬が本当に楽しく、何もかもが新鮮で、一生忘れられない思い出になり

ました。

また別の日には、2年生のホストと一緒に模型実習を行いました。私が2年生だった頃は石膏棒を使って歯型彫刻をしていたので、彼らの知識や実技、意欲やモチベーション、すべての面において尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。支台歯形成の練習中には、まるで先生のように線を引いてくれたり、「ここはこういう理由でこうしなければならない」と丁寧に教えてくれたりして、とても勉強になりました。

全体を通して、アメリカ人のデンタル IQ の高さや口腔に関する審美意識、やる気や意志の強さ、そして私生活と学業とのメリハリなど、日本で人づてに聞いていただけでは分からなかったことを、実際に自分の目で見て、肌で感じられたことで、身の引き締まる思いがしました。

また、何人かのホストとは将来の人生設計についても語り合いました。やりたいことや目標が細かく決まっていて、常に「今の自分に何が必要で、何をすべきか」を明確に考えており、彼らは何時間でも自分の将来について語れそうな勢いでした。その姿にとっても感銘を受け、励まされました。

これからも、彼らの何事にも真摯に向き合う姿勢を見習い、自分の成長につなげていきたいと思います。そして、彼らが3月に来日する際には、より成長した自分で再会できるよう、日々の臨床実習を大切にし、学びを積み重ねていきたいと思います。





③ 寶諸 知史

「同じ目標を持つ仲間たち」

羽田空港を出発し、デトロイト空港で乗り継ぎ、私たちがサンアントニオで宿泊するホテルに到着したのは、夜も遅い 23 時過ぎでした。それにもかかわらず、テキサス大学サンアントニオ校のメンバーは、ホテルで私たちを賑やかに出迎えてくれました。陽気な彼らも一日のスケジュールを終えて疲れていたはずですが、そんな様子はまったく見せず、「会えてうれしい」と温かい言葉をかけてくれました。

テキサス観光では、そんな彼らとともに行動し、州都オースティンを見学したり、カウボーイのように乗馬を体験したり、ワイナリーを訪れたり、ロデオを観戦したりしました。特に乗馬では、自分で手綱を操作し、補助なしに馬を歩かせることができ、とても興奮しました。また、バスでの移動中は、道幅の広さや延々と続く地平線の広大さに圧倒されました。観光が終わった後も、彼らは毎日のように私たちのホテルを訪れてくれ、一緒に飲んだり遊んだり、会話を楽しんだりすることで、友好をより一層深めることができました。そのおかげで、テキサス大学での研修も緊張せず、リラックスして臨むことができました。

大学での研修では、クラウン補綴における金属冠の調整を 2 年生と一緒に実施し、また、4 年生が実際に患者さんに対して抜歯やクラウン装着を行う臨床の様子を見学しました。金属冠の調整では、事前に配布されたレジュメを見ながら各自で作業を進め、要所で自己評価を行い、それを教員に確認してもらいながら最終評価を受けるという、私たちの大学とほぼ同様の実習形式でした。ただし、実習における金属冠鑄造といった技工作業は、学生自身では行わず、技工室に依頼するという形式であり、より臨床現場に即した実習となっているように感じました。

実習中に音楽を流すなど、彼らが陽気に楽しそうに作業しているのが印象的でした。次に見学した臨床では、すでに患者さんを担当している学生が、患者さんを出迎え、ユニットに案内し、治療を進めていました。中でも驚いたのは、患者さんを迎える際に軽くハグを交わすなどフレンドリーな対応をしていたことで、互いに良好な関係を築いている様子が伝わってきました。また、治療内容の説明や治療中の声かけも堂々としており、私から見ても医師と見分けがつかないほどでした。

学生たちは、医療面接や診断、治療計画の立案から治療の実施に至るまで、すべて自分た

ちで行い、それらの情報を PC に入力してスケジュール管理やフィードバック評価も自ら行っていました。次の手順に進むタイミングで上級医の確認を受けるという形式でした。

治療中に発生した問題に対しても、たとえばジルコニアクラウンでは咬合紙の色がつきにくいためワセリンを用いる、クラウン試適時には必要に応じてマージン部の適合をエックス線で確認するなど、学生自身が適切な対策を選択できる知識を備えており、それを実際に臨床で実践していることが、彼らの堂々とした診療姿勢につながっているのだと感じました。これらの経験を通じて、見学や介助が中心の現在の自分たちとの臨床経験の差を痛感し、早く歯科医師免許を取得して臨床の現場に立ちたいという思いが強くなりました。そのためにも、今の臨床実習の中でより多くの知識を身につけていきたいと、気持ちを新たにしました。

また、将来について彼らに尋ねると、4 年生はもちろん、2 年生の段階でも一般歯科医や専門医を目指しているなど、明確な目標を持っており、自分もそれを見習って卒業後の進路を考え、今のうちから行動する必要があると認識しました。

私は、彼らと肩を並べられるよう、歯科医師免許取得後の進路も見据えながら、日々の勉強や臨床実習に励み、一人前の歯科医師になれるよう努力していきたいと思います。





④ 宮定 雄一

「激濃の 10 日間」

まず、今回の研修をサポートしてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

入学時から海外研修に興味を持ち、長い間参加を希望していました。新型コロナウイルスの流行により、例年通りの派遣が行われるのか不安でしたが、派遣が決まったときの喜びは今でもよく覚えています。

これまでほとんど海外に行った経験がなく、渡航に必要な書類の準備など不安も多くありましたが、過去に海外研修に参加された先輩方や学事課の海外研修担当の方々のサポートのおかげで、無事に準備を終えることができ、大変助かりました。

初日には羽田近くのホテルで朝日大学の研修生との顔合わせがあり、翌日のフライト前にお互いを知ることができたのはとても良かったです。羽田からデトロイトまで 12 時間、6 時間のトランジットを経てサンアントニオまで 3 時間という長時間の移動でしたが、滞在先ホテルに到着すると、ホストの方々が温かく迎え入れてくださり、とても嬉しく、元気が出ました。

その翌日にはウォッカ工場や州議会議事堂の見学、その次の日には乗馬体験など、最初の 2 日間でテキサスのさまざまな場所に連れて行っていただきました。ピザやハンバーガー、BBQ などアメリカらしい食べ物もたくさん食べることができ、素晴らしい思い出になりました。

特に強く印象に残っているのは、研修 3 日目以降に始まった病院見学です。朝一番で病院に到着すると、たくさんのバディが横断幕などを持って正面玄関前で迎えてくれ、とても温かい気持ちになったことを覚えています。

その後の病院見学では、第一印象として「とにかく大きい」、そして「教員や学生向けの設備が非常に充実している」ということでした。生理学や病理学など基礎系科目の研究者には一人一部屋が与えられていたり、学生にはカフェや自習室が完備されていて、自分の集中スタイルに応じた環境が選べる点、また、患者の頭部から胸部まで再現されたシミュレーター付きの実習機が一人ひとりに与えられている点など、勉強や実技の練習に対するモチベーションが高まる環境が整っており、非常にうらやましく感じました。

このような設備面においては、本学と大きな差があると実感しました。すべての学生に専用の実習機を与えるのは難しいかもしれませんが、学校での自学自習環境をより整えてほしいと感じました。

その後、研修の証明書とスクラブをいただき、以降の病院実習はそのスクラブを着て参加することになりました。研修 4 日目から始まった実習で特に驚いたのは、4 年生が患者さんの“担当医”として、実際に治療を行っていた点です。学生は患者さんに問診を行い、その症状やデンタル、パントモ画像をもとに診断を行い、作成した治療計画を指導医に提示して OK をもらってから治療に進みます。治療中も常に指導医の確認を得ながら進めていき、基本的にはすべての行為において指導医の許可が必要な形でした。

他にも日本で見てきたものとは異なる点がいくつかありました。たとえば、アメリカで使われているユニットには、日本のように患者さんがうがいをするためのシンクが付いておらず、実際にうがいをしている場面を見ることはありませんでした。また、口腔内に挿入するシリコンのような素材でできた器具があり、タービンなどから排出される水を自動的に吸引する仕組みになっており、術者が反対の手でバキュームを持たなくて済む点は非常に便利だと感じました。

その後の日程では、リバーウォークやワイナリーの見学など観光も行い、病院での研修ももう半日体験することができました。最終日は朝早くのフライトだったため、ホテルを出発するまでホストの方々と一緒に過ごしました。10 日間をともに過ごした人たちとの別れはとも寂しかったのを覚えています。

このテキサスでの 10 日間は非常に濃密なもので、海外研修に参加して本当に良かったと心から思っています。





⑤ 森田 麻莉

「一生の思い出のテキサス」

明海大学に入学したきっかけは、海外研修制度があることでした。1年生の頃から「必ず行きたい」と思い、それをモチベーションにして勉強してきました。新型コロナの影響で実施が不透明になり、不安もありましたが、今回こうして参加できたことを本当に嬉しく思います。メンバーに決まった日から、出発を心から楽しみにしていました。

飛行機でトータル16時間かけてサンアントニオ空港に到着し、そこから15分ほどで宿泊先のホテルに着きました。ホテル到着時には大勢のホスト学生たちによる大歓迎を受け、アメリカでの研修がスタートしました。想像以上に英語が聞き取れず、うまく気持ちを伝えられないことに焦りを感じましたが、それを理解してくれたホスト学生と、時には翻訳機の力も借りながら、少しずつコミュニケーションをとることができました。

研修期間中には大学を訪問する機会もあり、日本とアメリカの歯科事情の違いについて多くを学びました。特に学生の教育プログラムが大きく異なっていたのが印象的でした。アメリカでは4年制のプログラムで、1・2年生は授業と技工を学び、3・4年生は実際に患者さんを診る実習中心のカリキュラムに移行します。3・4年生には1人1台のユニットが与えられ、予約管理、治療計画の立案、デンタル撮影などをすべて自分で行っていました。ホスト学生のアシスタントを務めた際には、見たことのない道具がたくさんあり、それら一つ一つについて丁寧に説明してくれました。中でも印象的だったのは、カメラ型のX線照射機でした。ユニットの上で気軽にX線撮影ができ、1枚のみの写真を撮るには非常に便利な機械でした。ドクターのアシスタントで手一杯な自分にとって、すべての治療を自らこなすホストたちの姿は尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。「自分ももっと頑張らなければ」と、強く背中を押された気がします。

また、2年生のうちから技工の知識がとても豊富で、すでに4年間勉強している自分よりもできることが多いと感じる場面もありました。毎週のように窩洞形成のテストがあり、そのために深夜まで残って練習していると聞きました。2年生にも技工用の机が与えられており、マネキンやハンドピースが常設され、いつでも練習できる環境が整っていることに感銘を受けました。実際に見せてもらった支台歯形成の仕上がりには、思わず息をのむほどでした。また、私たちが「抜歯処置を見てみたい」と伝えた際には、4年生の学生がすぐその場

に案内してくれました。誰もが自由に治療の様子を見学できる環境も、とても魅力的でした。

大学病院訪問以外の日程では、ウォッカ工場、州庁舎、乗馬、カウボーイ体験、ワイン工場、リバーウォーク、アラモ、アウトレット、ロデオ体験など、さまざまなプログラムに参加しました。テキサス州はメキシコに近いので、メキシコ文化の影響が色濃く、メキシコ料理をいただく機会も多かったです。アメリカを訪れるのは初めての経験だったので、全てが新鮮で、ただ車で移動するだけでも楽しく感じました。ホスト学生はとても優しく、英語が話せない私の代わりに注文をしてくれたり、おすすめを教えてくれたりと、いつも親切にしてくれました。言葉が通じなくても心が通じ、友達になれたことは大変貴重な経験でした。次に再会するときは、お互いが歯科医師になっている姿であれたらと思います。

私は歯科医師としての目標を持っていますが、テキサスの学生たちはそれ以上に細かい目標を立て、それに沿って今すべきことを実践しているのだと感じました。今回の研修では、テキサスの学生だけでなく、朝日大学の学生との出会いや交流を通じて、今よりもっと先の未来の目標まで明確に描けるようになった気がします。

この研修は、私のこれまでの人生の中で、最高の思い出となりました。





アラバマ大学バーミングハム校

2023 年 8 月 21 日（月）～8 月 30 日（水）（10 日間）

インストラクター 岡 本 和 彦 教授（有床義歯補綴学分野）

学 生 大 畑 元 就 岡 田 紗 季 濱 良 衣

森 重 千 秋 山 岸 咲 来



3 アラバマ大学バーミングハム校

The University of Alabama at Birmingham

(1) インストラクター

岡本 和彦（機能保存回復学講座 有床義歯補綴学分野 教授）

「2023 年度米国アラバマ大学バーミングハム校歯学部における奨学海外研修に引率して」

【はじめに】

2023 年度米国アラバマ大学バーミングハム校歯学部での奨学海外研修は、8 月 21 日（月）から 8 月 30 日（木）までの 10 日間にわたりました。この海外研修には、明海大学歯学部から 5 名（女子 4 名，男子 1 名）、朝日大学歯学部から 5 名（女子 4 名，男子 1 名）の研修学生、そして引率教員 2 名（各校 1 名）の計 12 名が参加しました。

今年度の研修は、新型コロナウイルス感染症の影響により、4 年ぶりの再開となりました。出発日の 8 月 21 日（月）に羽田空港に集合し、国内交流として朝日大学の学生と親睦を深めるために食事会を行い、米国アラバマ州に向けて日本を出国しました。学生たちは、飛行中、異国文化への緊張と不安が入り混じる様子でしたが、それを上回る期待感からでしょうかジョージア州アトランタ空港での米国入国審査を終える頃には、14 時間の時差を感じさせない元気がみられました。その後、飛行機を乗り継ぎ、アラバマ州バーミングハムへ向かいました。

日本を出発して約 1 日後、予定通りアラバマ州バーミングハム国際空港に到着し、空港ロビーでアラバマ大学バーミングハム校のホスト学生たちから熱烈的な歓迎を受けました。研修学生たちは、初めて訪れるバーミングハムの地で、ホスト学生たちとの対面に再び緊張と不安を抱えているようでした。

【研修プログラムについて】

研修プログラムは、研修期間全体を通じて、歯学部クリニック内でのホスト学生の治療時の診療補助や見学が主要な活動でしたが、その他にも様々なプログラムが計画されていました。臨床見学では、ホスト学生が 1 対 1 で患者の治療を行っていたため、研修学生は実際の診療に参加し、歯科治療のプロセスを学ぶ機会を得ました。この実務体験を通じて、臨床医

療の実際の現場でのスキルと知識を向上させることができ、非常に貴重な体験になったのではないかと思います。

アクティビティの一環としては、NASA の見学やマイナーリーグ野球の観戦、アトランタの博物館巡りなどのプログラムが組まれていました。これらの活動は、日々の研修の疲れを癒すだけでなく、ホスト学生とのコミュニケーションを深める貴重な機会となりました。異文化の体験や新しい場所での探索は、学生たちにとって刺激的で充実した時間になったと思います。

【交流について】

米国における歯学部への入学システムの違いから、ホスト学生は研修学生よりも多くの経験を積んでいるため、研修学生に対して先輩的な役割を果たしていただきました。このことが、当初は研修学生たちにとって心配されたコミュニケーションに対する不安を和らげ、時間が経つにつれて積極的な交流を行う姿勢を身につけました。一方、コミュニケーション手段としてスマートフォンを多く活用する場面も見受けられ、時代の変化を感じました。

また、学生たちは渡航前から、日本の文化や風習をホスト学生に紹介するための準備を行い、交流を深める多くの経験をしました。これらの経験は、国際交流に参加した学生たちにしか得られない貴重なものだと感じます。この準備と交流の中で、学生たちは相手を尊重する方法、協力する力、そして国際交流を深める方法を学んだと信じております。

【最後に】

異国環境での研修期間を健康で無事に修了できたことは、学生の努力と奮闘の賜物であり、深い敬意を表します。そして、研修学生たちに対しては、アラバマ大学バーミングハム校歯学部での奨学海外研修を通じて、国際的な視野と認識の重要性を理解し、国際的な視野を備えた歯科医師として成長することを切に望んでおります。

私は今回で5度目の引率者としてのアラバマ大学バーミングハム校歯学部の海外奨学研修となりました。アラバマの地は私にとって懐かしく、教員や医療スタッフから温かく迎えられ、有意義な時間を過ごすことができました。これからも、学生だけでなく教員にとっても、アラバマ大学バーミングハム校歯学部との国際交流が一層発展することを祈念いたします。この10日間にわたる海外奨学研修を無事に修了できたのは、アラバマ大学バーミングハム

校歯学部の関係者の協力、特に Dr. Nicolas 歯学部長をはじめとするスタッフやホスト学生の計画と支援のおかげだと感謝しています。また、明海・朝日大学学事課の皆様には、御尽力と御助言、そして引率教員である私に対する励ましのお言葉をいただきました。朝日大学の太友克之 学長と期間中に終始御教示いただいた朝日大学歯学部の奥山克史 准教授に感謝いたします。ならびに、この貴重な機会を与えてくださいました宮田 淳 理事長、中嶋 裕 学長、申 基喆 歯学部長、坂 英樹 教務部長、日比野 靖 学生部長、藤澤政紀 国際交流委員長に深く感謝申し上げます。



(2) 学 生 5 名

① 大畑 元就

「かけがえのないアラバマでの研修」

私は今回、アメリカのアラバマ大学バーミングハム校歯学部での海外研修プログラムに参加しました。私がこの海外研修プログラムに参加した理由は、大学内で学ぶだけでなく、このプログラムを通して海外の歯科事情に直接触れて、自分の将来の歯科医師像の幅を広げたいと考えたからです。この海外研修の参加が決まった時から実際に渡航するまでは、海外の歯科治療を見ることができるのだという期待と、言語の壁を超えたコミュニケーションの難しさに対する不安など、さまざまな感情が交錯していました。

しかし、バーミングハム空港に着いて、現地でホストのみなさんが笑顔で迎えてくれたおかげで緊張が和らぎました。歯学部見学は計 4 日間行い、貴重な経験をさせて頂きました。ホストの学生がクリニック内の設備や特徴を説明してくれて、私は全ての診療科を一通り見学することができました。バーミングハム校歯学部の設備はとにかく充実しており、診療がより行いやすい小さな工夫がたくさんしてありました。日本と大きく違うところは、まず診療スペースが完全個室で各診療スペースが広く、その場に器具が揃っているということです。バーミングハム校歯学部では 1、2 年生から模型実習や診療のアシストを行い、3、4 年生からは実際に学生が診療を行っていました。個室であるため、診療をしていた先生や学生、患者さんもととてもリラックスをしている印象を持ちました。また治療するにあたっては、3D プリンターを用いた手法が日本よりも多く見受けられました。他にも、具体的な細かな工夫点は、例えば、探針とプローブが 1 つになっていたり、ラバーダムがプラスチック製であったり、小指に多くのバーを収納できる入れ物をつけていたり、個室内で口腔内写真が撮れ、そのレントゲンをすぐパソコンで表示したり、放射線室は被曝量が少なく短時間設定しているため扉をつけていない点などです。またアメリカの街並みと同じように、個室にある器具は日本に比べるとカラフルで見つけやすかったです。実際に私のホストが診療している姿を見学したとき、私は彼が自身の患者さんとコミュニケーションを取りながら、担当の先生と治療の流れの指摘や議論をしている場面を見て、距離が近く真剣に診療している姿に同じ歯学部生として心から尊敬することができました。また彼は自身が頑張って患者さんに全部床義歯を製作した話を私にしてくれました。その時の患者さんの状態や治療方針、根拠ある

アプローチを説明してくれて、衝撃を受けたのと同時に、自分の臨床実習に対するモチベーションの向上にも繋がりました。

また、アメリカでは自費治療が基本であるため、日本で多く行われているコンポジットレジン修復もアメリカではあまり行われていないと聞きました。他にも、開業医や専門医が行う歯科治療に比べて、学生が治療する場合は治療費が少し低くなるというシステムであるため、ロサンゼルスのような少し離れた所からでも UAB の学生に治療してもらいたいという患者さんが多くいると知りました。UAB の学生にとっては実際に治療を行えることで自分の技術向上に繋がるし、患者さんにとっては少し安く治療してもらえるとという利点が一致していて、これは良いシステムだなと私は感じました。 病院見学だけでなく、ホストたちは観光や食事、アクティビティなど多くの計画を立ててくれて、連れて行ってくれました。バルカンパーク・ミュージアム、コカ・コーラミュージアム、ジョージア水族館、ピクルボール、ハンツビル宇宙ロケットセンターなど、初めて経験することや行くところばかりで毎日がとても新鮮で楽しかったです。また多くの経験を共にした UAB 学生との交流を通じて、日本とアメリカの文化や風習の違いも知ることができました。

最後に、ホストを初めとする多くの UAB の学生や先生方、このプログラムの関係者の方々によるご支援に心から感謝申し上げます。





② 岡田 紗季

「アラバマ大学の歯科医療と文化の違いに触れて」

入学時の面接で目標に掲げていた学生奨学海外研修に参加することが確定し、嬉しさとともに、この研修を通じて自分の視野を広げ、将来の糧にしたいと強く思いました。しかし、言語が異なるアメリカでのコミュニケーションは、やはり簡単なことではありませんでした。初日は、説明される内容や普段の会話で単語を一つ一つ理解するのが精一杯で、言葉が通じないことに焦ることも多くありました。しかし、ホストの学生たちが本当に親切に歩み寄ってくれたおかげで、次第にコミュニケーションが取れるようになり、とても有意義な研修となりました。

アラバマ大学では、小児歯科、歯周病学（ペリオ）、補綴学（有床・Cr-Br）、口腔外科、矯正歯科など、さまざまな科を3日間にわたって見学させていただきました。その中でも特に興味深かったのは、ペリオと口腔外科でした。ペリオでは歯周外科手術を見学しました。その際、下顎歯列の欠損部位（左側大臼歯以外すべて）のフラップ形成と骨整形の処置を、4年生の学生が行っていたことに驚きました。アメリカでは、4年制大学を卒業後、4年制の歯学部に進学し、3年生・4年生の学生が担当患者を診ることは知っていましたが、まさかそのような高度な処置を学生が行うとは思っていませんでした。さらに、口腔外科では、単純抜歯だけでなく、埋伏歯の抜歯も学生が担当しており、縫合時には有鉤ピンセットを使用しないなど、日本との違いが感じられました。

また、診療室の雰囲気も日本とは異なっていました。例えば、学生が使う診療室には、材料系を一斉に管理するヨシダのような部屋があり、必要なものはその部屋から取りに行く形式で、チェア周りが非常にスッキリとしていました。さらに、半個室のチェアに座ったままデンタルX線を撮ることができる環境が整っており、パソコンで患者のカルテやエックス線写真を一括管理している点も印象的でした。

感染対策も徹底しており、医療従事者や観血的処置でなくても、患者が触れる場所にはディスポーザブルの青いテープが貼られていたり、普段は拭いて再利用している物も、患者ごとに廃棄していたりしました。さらに、私たちが見学していると、すれ違うドクターや学生がとてもフレンドリーに声をかけてくれる雰囲気もとても良いと感じました。

アメリカでは、担当の教員と近い距離でチェックを受けながら、問診から治療計画、その治療全てを自分で行うことで知識が定着するため、日本でもできるだけ早い段階でこのようなカリキュラムを取り入れてほしいと強く感じました。また、アラバマ大学には、病院だけでなく、学生が利用できるジムや野球場などの施設も整っており、実習室には口腔内スキャナーをはじめとする最新の機器が揃い、非常に充実した練習環境が提供されていました。

病院見学のほかには、トップゴルフやピククルボールなどのスポーツを楽しんだり、コカコーラミュージアム、ジョージア水族館、宇宙センターを訪れたり、ターゲットというスーパーでショッピングをしたりしました。ホストの学生は診療のない時に私たちのところに来てくれ、他のホスト学生と交流することもできました。

最後の夜のフェアウェルパーティーでは、ホストの学生と話しているうちに寂しさを感じ、自然と涙が出てきました。あっという間の10日間でしたが、アラバマ大学の学生たちの歯科医療に対する意識の高さを実感し、帰国後の実習ではより積極的に学ぼうと思いました。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった岡本教授をはじめ、コロナ後にこの研修の場を提供してくださった明海大学、アラバマ大学、研修に関係するすべての方々、そして両親に感謝の気持ちを伝え、これからも努力を続けていきたいと思います。





③濱 良衣

「アラバマ大学の歯科治療と人と人との繋がり」

私は今回、アラバマ大学バーミングハム校への海外研修に行かせていただきました。研修で経験したことを振り返ると、アメリカの歯科医療はもちろんのこと、文化の違いや、人と人との関わり、繋がり大切さなど、たくさんの気づきを得ることができました。病院見学では、先生方やホストの方々の歯科に対する強い思いや志を聞き、自分がこれから進むべき道や目標などを再確認できた貴重な10日間でした。

思い返せば、出発の日が近づくにつれて、期待と不安で胸を躍らせていたのが懐かしく感じます。

出発の当日は、期待よりも「うまくやっていけるのだろうか？」といった不安が勝ってしまい、苛まれていましたが、14時間のフライトを経て、バーミングハム空港に到着した際、その不安は一気に掻き消されました。現地時刻で23時過ぎにも関わらず、ホストの方々が「Welcome to the USA」のスローガンを掲げて温かく迎えてくれたからです。

翌日から始まった病院見学では、自分が見てみたい診療科を事前に伝え、自由に見ることができました。ここには、5、6時間や1日かけて歯科治療を受けに来る患者さんも少なくなく、アメリカの歯科医療のニーズの高さを実感しました。

私が見学したのは、小児歯科、矯正歯科、補綴科、外科などで、実際の歯科治療を間近で見学してみて、まずどの診療科でも科を飛び越えて、先生と学生の距離が近く皆がフレンドリーであること、さらにアシストではなく学生も自ら患者を受け持ち、自分の診療に関して責任と威厳を持っていることに感銘を受けました。

外科では抜歯を2回見させていただき、保存科では根管治療を行なっている様子を見せていただいたのですが、患者は鉛エプロンをかけ、ユニットチェアに座った状態でレントゲンを撮るという、日本ではない光景も見ることができました。

病院見学の中でも、一番印象に残っていることは、ホストの学生が学生であるにも関わらず、先生方や教授と向き合い、意見を交わし合いながら、より良い治療をするために最善を尽くしている姿です。私もこの姿に感化され、「今のままではいけないな」と考えさせられました。

それだけでなく、10日間の間にホストの学生にたくさんの場所に連れて行っていただきま

した。ゴルフ、バルカンミュージアム、コカ・コーラミュージアム、ジョージア水族館、プール、野球観戦など、ホストの方々とコミュニケーションをとる機会も多くあり、歯学についてだけでなく、文化の違いや表現の仕方、コミュニケーションをとる大事さを学びました。

今回の海外研修で、海外の歯科医療を実際に現地に行って自分の目で確かめられたこと、歯学のことでなく、多種多様な人種の方々と過ごすことで視野が広がりました。出会いに感謝し、どの国にも歯科医師を目指す、同じ道を歩む仲間がいることを忘れずに、さらに勉学に励まなければと思いました。

このような貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。



④ 森重 千秋

「アラバマ大学バーミングハム校歯学部での素晴らしい経験」

アラバマ大学の特色は、アラバマ州で最もレベルの高い高等教育機関であり、大学自体が都市と一体化しているため、患者の多さから様々な症例を見ることができる点だと私は思いました。私たちのホストの学生は現在4年生で、自分専用のチェアとキャビネットを持ち患者さんの治療を行っていました。私が見学したときは義歯の調整と印象採得を行っており、その手つきも学生とは思えないほど慣れたものでした。また使用している材料や診療の仕方1つとっても日本と異なり興味深かったです。特に記憶に残っているのが印象採得で使用するアルジネートです。日本ではピンク色を使用しているのをよく見かけますが、アラバマ大学では白色を使用していました。理由を聞くと、その上からさらに盛ったときに分かりやすくするためだと言われ、そういう考え方もあるのか、と納得しました。また水と粉を練和するとき、日本では適量で行いますが、アラバマ大学では水を少な目で練和し、トレーに盛って最後表面を整えるときに水を含ませており、それも驚きつつ納得しました。

また見学したい診療科を見に行くことができるのも1つのポイントで、自分の興味がある分野を伝えればそこに連れて行ってもらえるなど、病院内をしっかりと見ることができ、最終的には全ての科をまわることができたので良かったです。どの科も学生が主に診療し、ドクターがチェックしてそれに対しアドバイスをしていました。多くのドクターや学生と接する機会があり、みんなそのたびにあたたかく声をかけてくれました。また先生と学生の距離が近く、学生であっても先生にしっかりと自分の意見を言っていたり冗談を言いあったりする関係がとていいなと思いました。

私たちのホストはもちろんアラバマ大学の先生方にはアクティビティでの移動時の車の運転など研修中ずっとお世話になり、あたたかく歓迎して頂きました。最も印象に残っているのは、1番最初にアラバマ空港で出迎えてくれたときです。異国の地という不安な気持ちを持ちつつ時差ぼけや長時間のフライトなど身体的にも精神的にも疲れていたときに、夜遅くにも関わらずみんな笑顔であたたかく迎えてくれました。私はそのときはじめて、ここにきてよかったと思いました。また病院見学だけでなく、遊びや観光など本当に色々な場所へ連れていってもらいました。野球観戦や宇宙センターの見学に、ショッピングや水族館、コカ・コーラミュージアムなどにも行きました。その他にもゴルフの打ちっぱなしのゲームや

プール、ピククルボールという卓球とテニスをまぜたようなスポーツも体験し、汗をながし楽しみました。またホストの自宅に招待していただき、手作りのごはんやアイスクリームを食べたりもしました。どちらもとてもおいしかったです。私たちを楽しませようと計画してくれたことはもちろん、遊びや観光を通じてホストと仲良くなれたことが何より嬉しかったです。

UAB ではこの研修プログラムに毎回多くの学生から申請があるそうで、その中から教授に選ばれた人柄もよく臨床技能も高いトップレベルの学生たちばかりが集まっていました。私たちも同じ歯科医師を目指す同年代の学生として、優秀である彼らの考え方や実生活に触れ意見交換できたことで視野が広がり、私にとって大きな財産となりました。この貴重な経験の数々や多くの学びを得て、とても充実した研修になりました。このような機会を頂けたことに感謝して、ここで培われた経験を今後に反映していけたらいいと思います。





⑤ 山岸 咲来

「海外研修で得られた学び」

まずはじめの情報として、アメリカで歯科医師になるためには、通常の4年制大学を卒業し、その後四年制の歯学科に入学するため、基本的に歯科医師になるためには計8年間必要となる。アラバマ大学では、1、2年生の間は解剖学、免疫学、内分泌学など医学部や薬学部と合同で受講し、同じ試験に合格しなければならず、3、4年生では、最低限行わなければならない治療、術式、処置の数が決められており、それを卒業までに達成しなければならない。

アラバマ大学の病院見学では、口腔外科、矯正科、小児歯科、歯内療法科など様々な診療科を見学させて頂いた。一つ一つの診療科を回る度にその科の先生が私達を歓迎してくださり、仕事中にも関わらず時間を割いて、その科の特徴や診療内容を私達にも分かるような英語で説明して下さった。様々な診療科を回ったが、その中でも印象深かった事がいくつかある。まず1つにアラバマ大学では、放射線科というものがない事だ。どの診療科もユニットごとに区切りがあり、個室のような所で診療しているのだが、そのユニットごとにエックス線装置が置いてあった。歯内療法科では、根管拡大を行った後、その治療を行っているチェアのまま、エックス線写真を取り、それを近くにあるパソコンのモニターに写し出し、適切な方向、位置に拡大できているのか確認できるようになっていた。エックス線装置以外にも治療に使用するほぼ全ての器具、機械が個室の中に置いてある状態であるため、治療しやすい設備が整っていた。放射線の防護については、患者さんには防護エプロンをつけ、術者は扉のない個室から出るという程度で、鉛の壁でしっかり覆われたところで写真を撮る日本とは放射線の防護に関しての考え方が異なると感じた。

2つ目に大学内にいる歯科衛生士がとても少ない事だ。歯科衛生士を雇うにはとてもお金がかかるため、アメリカの歯科医は開業してから歯科衛生士を雇うそうだ。日本の歯科衛生士は、歯科医師の指示がないと動けないがアメリカの歯科衛生士は歯科医師の指示なしでレントゲン撮影、局所麻酔、歯周病の診断などが行える予防のスペシャリストとして、歯科医師と対等に仕事をしている事を聞き驚いた。

また学生の積極性も日本とは大きく違うと感じた。どの学生もどの科の先生とも仲が良さそうで、どの科に回っても気さくに先生と話をしていたり、治療方針についてしっかりと意

見を持った上で先生と議論していたりしており、学生の意欲・志の高さの違いに圧倒された。この積極性は私が見習わなければならない面だと感じた。

大学以外にもジョージア水族館やコカ・コーラミュージアム、宇宙ロケットセンターなどを観光したり、ピククルボールや野球観戦、ゴルフ、プールなど様々なアクティビティをしたりした。毎日がとても楽しく、充実した時間を過ごすことが出来、日々の診療や勉強の忙しい合間をぬって、私たちの相手をして下さった先生やホストには感謝しきれない。

アメリカで行われている歯科医療の現状を学生の中に自分の目で見える機会を頂けた事は、とても貴重な事であり、これから歯科医師を目指していく上でも、歯科医師として従事していく上でもとても大きな刺激・経験になったと思う。自分がこれからどんな歯科医師になりたいのかをもっと深く考えたり、もっと気を引き締めて臨床実習や勉強をしたりしなければならないと感じるきっかけになった。このような素晴らしい貴重な機会を頂けたことに深く感謝致します。





タフツ大学歯学部

2024 年 3 月 11 日 (月) ~ 3 月 16 日 (土) (6 日間)

インストラクター 羽 田 詩 子 准教授 (朝日大学教員)

学 生 久保田 拓 人 松 木 ひなの



Tufts
UNIVERSITY

4 タフツ大学歯学部

Tufts University School of Dental Medicine

学 生 2 名

① 久保田 拓人

「海外の歯科医療に触れて、大海を知る」

今回、タフツ大学で過ごせた5日間は私にとって貴重な経験となりました。

タフツ大学はアメリカのマサチューセッツ州ボストンにある私立大学です。ボストンは古い歴史があり、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学（MIT）といった有名大学が集まる、自然豊かな美しい街です。そのボストンの中でも非常に都会的な繁華街にタフツ大学は立地しています。そのような素晴らしい場所に行くにも関わらず、私は英語が話せない不安と、約13時間も飛行機に乗るという恐怖を抱えながら、3月11日に日本を出発しました。

到着した翌日、タフツ大学を訪問すると、私は多くのことに気付くことができました。まず、意思疎通ができることの重要性です。タフツ大学に着くと、アメリカ人のモーガン先生が出迎えてくれて校内の案内などをしてくれたのですが、英語がいまいち理解できない私たちとは、コミュニケーションが取れませんでした。しかし、モーガン先生がタフツ大学で日本語を話せる方を見つけてくださったおかげで、どうにか充実した研修を行うことができました。また、タフツ大学ではほぼ毎日、しっかりとプログラムされた素晴らしい病院見学をすることができたのですが、診療を見学していると気さくな患者様が英語で話しかけてくださいました。しかし、私の英語力では到底コミュニケーションが取れず、患者様も愛想を尽かせてしまい、非常に悔しい思いをしました。これらのことから、しっかりとコミュニケーションを取り、意思疎通できることの重要性というものを改めて認識することができました。

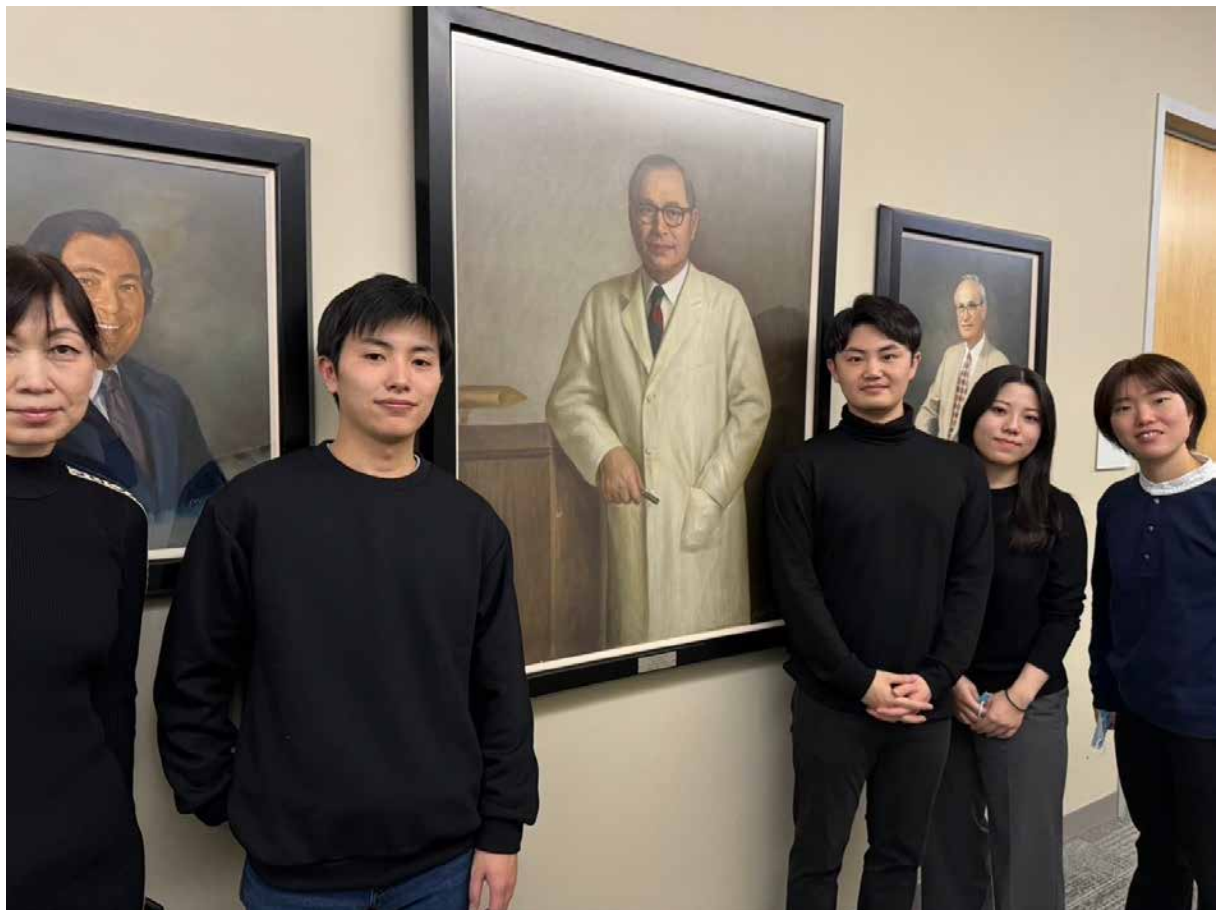
次に、タフツ大学では学生が主体性を持って病院実習を行っていることに感銘を受けました。タフツ大学では、学生がアシストするだけでなく、実際に治療を行っており、私が見学した中で、患者様の顔にボトックス注射を打つという治療がありました。顔の半分は指導医の先生が施術をしたのですが、もう半分は指導医からの助言を受けた学生が行っていました。その学生は初めてボトックス注射をしたそうですが、非常に自信を持って治療することができていて、しっかりと患者様と向き合っている様子で、本当にかっこよかったです。今

までの私と比べてみると、タフツ大学の学生は主体性と積極性を持っており、非常に見習わなければいけないと感じました。

また、アメリカと日本の歯科治療にも違いがいくつか見受けられました。まず、レントゲン撮影がチェアに座ったまま行える点です。根管治療の見学をさせてもらいましたが、患者様はラバーダムを付けたまま、移動することなくレントゲン写真が撮れていたのも、非常に便利だなと思いました。さらに、各チェアごとにパソコンが装備されており、患者さんごとのデータがまとめられていて管理しやすそうな印象も受けました。他にも、印象材の練和機や器具入れなど、どれもチェア周辺に効率的に配置してあり、素晴らしいなと感じました。

最後になりますが、今回私を海外研修へ行かせていただいた明海大学、朝日大学の関係者の方々、引率してくださった羽田先生、そして今回海外研修を共にできた松木さん、安部さん、梶川さんに深く感謝いたします。今回の海外研修の経験を生かして、少しでも理想の歯科医師像に近づけると良いなと思います。





② 松木 ひなの

「充実した日々」

タフツ大学はアメリカ合衆国の東海岸に位置するマサチューセッツ州のボストンにあります。成田空港からの 13 時間のフライトはあっという間に到着し、心配していた時差ぼけなどありませんでした。

大学は Tufts Medical Center という地下鉄の駅に隣接しており、ホテルの近くの駅から地下鉄に乗り 25 分ほどかけて通いました。地下鉄の改札を抜け階段を上ると目の前に立派なタフツ大学病院があり、その隣の 15 階建てのビル内に歯学部施設と病院がありました。ビルの中はどこも窓ガラスが大きく光が差し込み、そこから眺めるボストンの街並みはとても美しかったです。

アメリカでは 4 年生の大学を卒業してから歯学部に入学することができ、そこでまた 4 年を過ごすそうです。そして 3、4 年生は主に病院で実際に患者さんの治療をするそうです。今回の研修では頭蓋顔面痛科、歯内療法科、歯周病科などを周り、学生が患者さんのお話を聞き治療を行い、時折先生のアドバイスをもらいながら治療を進めていく様子を見学しました。歯周病科ではフラップ手術を見学し、その中で歯周病学は日本もアメリカも同じ考え方に基づいているので、治療法に大きな違いはないとの説明を受けました。歯周病科では、日本人の緒方先生に病院を案内してもらい、アメリカの大学に来た経緯なども聞くことができ、大変参考になりました。

歯内療法科では、指に指ぬきのようなものをはめ、そこでファイルを抜き差ししながら治療をしており、便利そうに見えましたが、針刺し事故が起こらないかと心配になりながら見学しました。また、ユニットにデンタル X 線撮影装置が併設されており、治療を終えたら患者さんをユニットに座らせたまま X 線撮影を行い、その場でその日に行った治療の説明を行っていました。昔は日本でも X 線撮影装置が備え付けられているユニットがあったというのは聞いたことがありましたが、今の日本では放射線防護の点から見ることはできないので驚きました。

今回の研修の反省点として、私は英語での会話に慣れていなかったため、思うように質問や雑談ができませんでした。もう少し英語を学んでおけば、現地の学生とコミュニケーションをとれたのかと思うと残念です。

滞在中、ボストンに在住されている日本人の諸井先生、山本先生、技工士の百濟先生には本当にお世話になりました。特に諸井先生には、歴史ある素敵なレンガ造りの街並みが並ぶビーコンヒルやボストンコモン、チャールズ川といったボストンの観光名所を歩いて案内していただき、さらに美味しいロブスターのお店に連れて行ってくださいました。私がタフツ大学を志望した理由の一つに、ボストンの街並みを見てみたいという思いがあったので、アメリカ最古の図書館の目の前にガラス張りの超高層ビルが建っていたり、歴史を感じる建物と現代的な建物が並んでいるボストンの街を歩くことができ嬉しかったです。百濟先生には、ハーバード大学やクインシーモールといったショッピングモールを案内して下さり、現在のアメリカでの歯科技工についてのお話はとても参考になり、貴重な機会をいただきました。

また、ボストン滞在中に私の誕生日が重なり、サプライズで朝日大学の2人と久保田くんがお祝いしてくれました。アメリカらしいカラフルなロウソクがささったケーキ、とても美味しかったです。

最後になりましたが、引率して下さった朝日大学の羽田先生をはじめ、このような機会を与えて下さった大学および関係者の方々に深く感謝いたします。この研修で学んだことを将来に活かしていけるよう、今後も努力し続けようと思います。





メキシコ州立自治大学

2023年8月9日（水）～8月18日（金）（10日間）

インストラクター 村上幸生 教授（総合臨床歯科学分野）

学 生 荒井美羽 猪俣直希 河野圭介

深江宗諒 本田莉子



5 メキシコ州立自治大学

Universidad Autónoma del Estado de México

(1) インストラクター

村上 幸生（病態診断治療学講座 総合臨床歯科学分野 教授）

「私のメキシコ紀行・メキシコ人の hospitality に鑑みて」

メキシコ人の気質ってどんなものであろうか？6月に研修引率を命じられ最初に感じたことであった。春先まで本学 MPL にメキシコ州立自治大学（UAEM）の Dr. Alex が留学に来ていた。彼には10年程前、私が3学年歯学英语の科目責任者であったときに安達教授を介して講演をしてもらったが、その後は「Hello」程度の挨拶をしたくらいであった。メキシコが不安で仕方がなかった矢先の7月18日に突然のメールを頂いた；My name is Alex…We are expecting you guys and hope you will have a great time, please if you need or want something let me know I am here to help you, ok! …don't worry. 心暖まるメッセージを抱いて ANA Boeing 787 Dreamliner に12時間揺られメキシコシティー国際空港に到着した。メキシコは北米から続く2つの造山帯が国内で一つにまとまった高原国家で、首都メキシコシティーや UAEM のあるトルーカ市は標高 2,000m を超える高原都市で清涼感があり曆的に日没が遅かった。到着時はいわゆる「熱烈歓迎」状態でメキシコ人の hospitality の高揚を感じた。その後、トルーカ市内にバスで向かった。ホテルで学生らはホストファミリーに迎えられた。私はホストの Dr. Araceli とその夫で法律家の Mr. Javier、娘の Dr. Arantxa および歯学部関係者に夕食をご馳走になった。Arantxa は英語堪能で昨年の短期留学の学生でもあった。トルティーヤとタコス、アラチェラ、テキーラなど初めてのメキシコ料理が並び興味津々であった。Javier の車でホテルに送ってもらったが着いた途端に沢山の土産を頂いた。大変うれしかったが、すでに鞆に入りきらなかった。翌日、UAEM へ正装し、Ulycis 歯学部長と面会した。Welcome party では民族衣装に身を包み、飲んで踊っての大宴会、テキーラの応酬が23時まで続いた。学生の中には不眠の者もいたが、翌日は早朝5時にバスでメキシコ南方のオアハカへ2泊3日の視察観光へ向かった。UAEM の大型バスは快適ではあったが、行程は10時間・約520kmにも及んだ。オアハカは比較的暖かい土地で、我々はセント・ドミンゴ教会、テサン・パウロ・ヴィラ・デ・ミトラ遺跡、モンテアルバン遺跡など

を視察した。イエルベ・エル・アクア（化石の滝）視察では石灰岩質の山が繰り出す滝のような風景が印象的であった。オティトラン・デル・バジェ織物博物館では麻を主体とした製品の製作技術と販売を行っていた。「もし奥様にあげるとしたら…」？と Arex から質問を受け、その感想を述べたら、Araceli からお土産を頂いた。夕食は深夜に及びメキシコ郷土料理とメスカル（アルコール含有量 40～50%）もご馳走になった。当地のモレというチョコレート調味料は大変美味であったが、この頃より私は消化不良が頻発するようになった。学生の中にも風邪様症状や消化器不調を訴える者が散見するようになった。帰りのバスも 10 時間以上でトルーカには 23 時に到着。深夜の夕食は Javier の車でファミレスに行ったが小食で済ませた。学生 2 名に発熱症状が出たのは翌日であった。新型コロナ検査は陰性、服薬で完治できたが、私は待機のため翌日のテオティワカン視察をやめてトルーカ市内のコスモヴィトラル植物園やメトロポリタン大聖堂を見学できた。疲労のため毎回のメキシコ料理は少しきつく感じはじめ、Araceli や Javier に迷惑をかけたがメキシコイタリアン料理、アルゼンチン料理、など日本では味わえないような高級レストランでご馳走になった。飲んで・食べて・満腹になった？と熱烈サービスであったが、Araceli を始めとする Javier 一家の盛大な hospitality であったのは明らかであった。UAEM 本部訪問後のランチではメキシコ郷土料理が振舞われた。最終日の Farewell lunch では私を含めた全員が無事に研修修了を認められ、歯学部長から修了証を授与された。帰りの ANA は快適で皆心地よい揺れに身を持たせて成田に帰国した。今回の研修では UAEM に短期留学中の門倉先生や Alex にコミュニケーションの仲介をして頂き本当に有難かった。また、日本に留学経験のある先生が多く大変好意的に接してくれた。Araceli から追加のお土産もたくさん頂き、まさに muchas gracias な研修であった。

「人をもてなすとはいかなるものか」、メキシコ人の hospitality を真摯に感じた今回の研修であったが、思い返せば、2013 年の国際オリンピック総会で某キャスターが「お・も・て・な・し」という言葉を発していた。彼女はこのことを「訪れる人を心から慈しみ、お迎えする、先祖代々受け継がれていたもの」で「そのおもてなしの心があるから日本人がお互いを思いやり客人に心を配れる」と話していた。私にとっては研修というより修行という表現の方が合っていたような今回の研修は、古来より日本人が持つ奥ゆかしさが日本人らしい hospitality には重要ではないかと改めて感じたひと夏の経験でもあった。

(2) 学 生 5 名

① 荒井 美羽

「- 1 5 時間の空間で」

初めに、奨学海外研修派遣という貴重な機会を準備してくださった明海大学、朝日大学、メキシコ州立自治大学、ホストファミリー、そしてすべての関係者の皆様へ深く感謝申し上げます。

私たちは研修中、メキシコ州立自治大学の施設見学、診療、観光地巡り、ホームステイなど、日本から時差-15 時間のメキシコで多くの経験をし、人々の温かさに触れました。

初日、大学に着くとたくさんの学生や先生が日本の旗を振って歓迎してくださった。さらに、伝統的な踊りや音楽、食事まで、大盤振る舞いのメキシコ人のおもてなし精神に感動しました。初めてづくしの日々は、すべての経験がワクワクの種であり、口角が下がる隙がありませんでした。また、日本とメキシコの歯科事情には大きな違いがありました。特に驚いたことは、メキシコの学生が担当の患者を持ち診療していることです。私たちは今、病院実習で先生方の診療を見学させていただいたり、バキュームのアシストやポリッシング等、実際に患者に触れる機会をいただけたとしても必ず、そして常に先生の指導のもとにあります。しかし、同学年のメキシコの学生たちは自分だけで治療法を考え、診療を行っている。その姿は非常に大きな刺激となりました。研修中に、私も治療に参加できる機会をいただきました。患者にシーラントを施術したときは、歯学部生としての実感がより大きくなったことを覚えています。

休日はバスで 10 時間ほど移動して観光地を巡りました。世界遺産のオアハカ歴史地区のスペイン統治時代の建物が並んだ旧市街地や古代遺跡ミトラのモザイク壁、古代都市テオティワカンのピラミッド、自然保護区イエルベ・エル・アグアのインフィニティプールなど、目にしたもののすべてが見たことのない景色ばかりで、まるで映画の中の世界に迷い込んだかのような感じでした。私がメキシコでオススメするスポットは Cosmovitral Jardín Botánico という植物園です。窓ガラスはすべてステンドグラスになっており、日光が差し込むとキラキラと色とりどりに輝きます。園内には綺麗に手入れされた植物が並んでおり、ゆったりと流れる時間が心を穏やかにさせました。また、さいたま市とトルーカ市の姉妹都市を記念したモニュメントに刻まれた「友情の灯」の日本語は心を温めました。日本庭園を彷彿とさせる空

間や鯉が泳ぐ池も、メキシコで目にすると、より大切な日本の文化に感じられました。

メキシコの公用語はスペイン語です。そのため、英語と翻訳機でコミュニケーションを図ったが、言葉が分からなくても気持ちが通じ合ったり、母国の言葉を教えあったりしたときは、国を超えて繋がれたように感じて嬉しくなりました。また、ホストファミリーには本当に感謝しています。初めて会った、言葉も通じない日本人を本当の家族のように受け入れ、心地の良い家を作ってくださいました。パパ、ママと呼んでいるくらいの仲です。帰国時に頂いたお手紙の「あなたが来たいとき、いつでも来られるようメキシコの家のドアはいつも開いています」という言葉が忘れられません。家族からたくさん頂いたお土産で埋まった部屋を眺めると、今でもメキシコで過ごした日々を思い出して笑顔になります。

メキシコ人の心の温かさに触れた10日間は、1日1日が学びと刺激で満たされた大切な思い出となりました。この貴重な経験が今後の学生生活だけでなく、歯科医師としての私にも大きく役立てられるよう、より一層努力する。

最後にもう一度、奨学海外研修派遣に関わってくださったすべての関係者の皆様に感謝申し上げます。





②猪俣 直希

「メキシコでの経験」

メキシコで過ごした 10 日間はとても充実していて、さまざまな経験を得る機会となりました。今回の海外研修において、私が特にメキシコを選んでよかった点が二つあります。

一つ目はホームステイであるということです。メキシコへ旅立つ前、初めての海外ということもあり、英語ができるわけではない自分が馴染めるだろうか、楽しめるだろうかと不安に思っていました。しかし、メキシコシティ空港に着いて、メキシコの学生方が明るく陽気に迎え入れてくれ、「これならやっていけるだろう」と不安がなくなりました。初日のディナーが、今回の旅のペアであるアシュリーとその家族と一緒に食べると聞かされ、周りに日本人がいないことに焦りましたが、メキシコはスペイン語が公用語であるため、お互い翻訳やジェスチャーを交えながら、ぎこちない英語ではありますが会話することができました。そこから日々、ホスト先の家に帰ってからも英語で家族とコミュニケーションを取るうちに、少しずつ彼らの言うことが理解できるようになっていきました。最終日頃には、理解できる頻度が格段に増え、翻訳機能をほとんど使うことがなくなりました。また、私は途中の二日間風邪をひいてしまい、みんなとは別行動を取るようになってしまいました。その期間、アシュリーとお母さんが病院に連れて行ってくれたり、ご飯を作ってくれたりと面倒を見てくれました。そのおかげで風邪が長引かず、最終日の前日にはみんなと合流することができました。最終日には、お父さんが 2000 ペソ（日本円で 2 万円くらい）のジャケットやお菓子を買ってくれ、別れ際には「あなたは息子だ、家族だ、いつでも帰ってこい」と言いながらお母さんと一緒に涙を流してくれました。私もそれを見て感極まるものがあり、ホームステイであるメキシコを選んでよかったと、その時本当に思いました。

二つ目は、日本との歯科に対する意識の違いです。UAEM ではシーラント処置や UAEM の見学、ワックスアップなどを行いました。シーラント処置では、実際にホスト先の保護者に処置を行いました。行う前に UAEM の学生に手本を見せてもらってから行ったのですが、日本との違いが見られ感心しました。最初に PMTC を行ったのですが、明海大学付属病院のようなペーストではなく、一回分のペーストが小さいゼリーカップのようなものに小分けにされており、そこに水を入れ、薄めてから使用するタイプでした。また、ミラーは両面に鏡がついているタイプのものも使用していました。さらに、昨年やそれ以前のレポートを読んでい

たため知ってはいたのですが、治療が終わったらアルコールウェットティッシュで拭く明海大学附属病院と違い、ユニット、スピットン、チェアーすべてにラップのようなシートが敷いてあり、治療が終わったらそれらを外すだけで感染防御ができるようになっていました。ワックスアップは、UAEM で学んでいる歯科技工士の学生に教えてもらいながら実際に模型に行いました。手順などは私たちとほぼ変わりありませんでした。また、メキシコの学生は皆、普段や観光に出掛けた時はとことん陽気であり、全力で遊んでいるのですが、歯科に関することについては私たち日本人より熱心に考え、誇りをもって学んでいるように見受けられました。よって私も感化され、日本に帰ってからはさらに頑張ろうという気持ちになりました。

以上のことから、私はメキシコを海外研修先を選んで本当によかったと思いました。また、いつか必ずメキシコに行き、アシュリーとその家族、メキシコの学生に会いたいです。これらの貴重な体験を与えてくださった明海大学と朝日大学ならびにメキシコ州立自治大学、そして共に研修した四人と村上先生に感謝します。また、この経験をこれからの長い歯科医師人生において役立てていきたいと考えます。



③河野 圭介

「UAEM（ワエム）での研修を経て」

私が研修先にメキシコを選んだ理由はいくつかあります。もともと私はラテン系の人種、文化、アートが好きでした。加えて、先輩方のレポートから、メキシコが最も研修先で文化的交流が得られそうだと感じたのも大きな理由です。なぜなら UAEM は海外研修先の中で唯一ホームステイ制度を取っているからです。

ホームステイに関しては、正直不安の方が大きかったです。受け入れ先と馬が合わなかったらどうしようという心配がありました。しかし、それは到着後すぐに杞憂であったと分かりました。受け入れ先のバディであるブライアンとその家族はとても優しく、ホスピタリティに溢れていました。ブライアンに「優しすぎるよ」と伝えると、「メキシコでは心から客人をもてなすべきという考え方がある」といったことを言っていました。不満といえば、頼んでいた洗濯物が帰国前日に返ってきたため、何度か同じパンツを履いたことくらいで、10日間快適に過ごさせてくれたホストファミリーには感謝しかありません。特にホストファミリーと仲良くなったのは、二日目のウェルカムパーティーです。ウェルカムパーティーでは、日本からの派遣学生と各受け入れ先家族がすべて集まり、食事をしてテキーラを飲み、そして踊ります。私は人前で踊るような性格ではないですが、海外に来たテンションとテキーラの力を借りて楽しみました。気が付いたときには、ホストの家族の一員になっていたように思います。メキシコ人もマリアッチの衣装を着てあほみたいに踊っている人を悪い人間とは思わないのでしょう。

研修についてですが、UAEM では小児科や矯正科を見学させていただき、各科のカリキュラムや診療についての話を聞きました。日本の歯学部との最大の違いは、3年生から実際の患者さんを持って治療しているという点だと思います。また、私たちは実習として、バディと共にシーラントを患者さんに実施したり、UAEM の技工士と共にワックスアップをしたりしました。かわいいメキシコ人技工士からは「私の初めてのワックスアップより上手だ」と褒めてもらいました。嬉しさがこみ上げると同時に、日本の技術力の一端を見せることができたことに安堵したことを覚えています。

UAEM 歯学部の最大の魅力は、その環境の美しさにあったと思います。校舎には手入れされた中庭があったり、診療室は六角形のカウンターに合わせて放射状にチェアが並べられてい

たり、校舎の廊下の壁には直接大きなイラストがいくつも描かれていたりしました。壁のイラストは歯科材料のセメントを塗って描かれているということでした。そういった遊び心ある環境のなかで、楽しみながら学んだり働いている様子を見て、メキシコ人の国民性を感じると同時に羨ましく思いました。矯正科の学生との雑談の際、「素晴らしい環境なのでここで勉強したい」と言ったところ、本気にされ、UAEM の偉い人を呼んでこられてしまった時は焦りました。

ここには書ききれませんが、観光、移動のバス、食事、パーティーとすべての時間が楽しかったです。メキシコや朝日大学の学生全員と仲良くなることができました。メキシコ人はシャイで遠慮がちだったりして日本人に似たところもありますが、一度仲良くなると家族のように接してくれます。また、街中の人に話しかけても気さくに接してくれますし、アジア人が珍しいからと写真を頼まれたりもしました。メキシコ人はそこまで英語が上手くないので、こちらも気兼ねなく英語を試せるという点も、UAEM に行くメリットとしてあると思います。私はまた彼らに会った時のためにスペイン語をもっと勉強したいと思いました。

最高の思い出となった 10 日間、最後はブライアンと「いい歯医者になること」を誓い合い、空港でお別れをしました。今回の貴重な経験が今後の私の人生を豊かにすることは間違いないでしょう。このような機会を得られたこと、そして関わっていただいた全ての方に感謝いたします。





④ 深江 宗諒

「Viva México」

1 日目

12 時間という長い時間、飛行機に揺られメキシコシティに到着しました。入国審査を経て到着口に向かうと、一際目立つメキシコ人の歓声と日本語の横断幕が私を迎えてくれました。私は恥ずかしさを隠しながらも手を振り、今回の旅のペアであるキケの元へ駆け寄り、よそよそしくも挨拶を交わしました。その後、バスでトルーカという場所へ向かい、今回お世話になるキケの両親と顔を合わせました。私は初めての海外であり、言葉を話せないのはもちろん、ホストファミリーに馴染めるかとても心配でした。しかし、彼らは嫌な顔一つせず、私を迎え入れてくれました。

メキシコの気候は涼しく、とても過ごしやすい環境でした。そんなメキシコでの短い生活が始まりました。

2 日目

飛行機の疲れが取れない中、2 日目は早速学校を訪問し、実際にメキシコの歯科治療を間近で見学させていただきました。今回、明海大学の姉妹校となっているメキシコ州立自治大学（UAEM）を訪れ、たくさんの刺激を受けました。UAEM はメキシコの中で最も歴史が長く、歯科治療も進んでいるため、私と同じ年のキケも既に患者を持って治療をしており、とても刺激になりました。

学校訪問後、私たちへのウェルカムパーティーに伝統衣装を着て参加しました。疲れなど忘れるくらい楽しい時間を過ごせました。

3 日目～5 日目

この日は 2 泊 3 日の観光が計画されていました。バスで休憩を挟んで 10 時間かけてオアハカという場所に行ってきました。オアハカはとても街並みが美しく、珍しい食材や古い建物など、日本で言うと京都のようなところでした。バッタを食べたことだけは後悔しています。

研修 2 日目、3 日目はひたすら観光地を巡りました。よくテレビで見かけていた古代遺跡や自然が作り出したプールなど、日本では絶対に見ることのできないメキシコの文化や絶景を見ることができました。こうして 2 泊 3 日の充実した旅が終わりました。

6 日目

この日も朝早くからテオティワカンという古代遺跡に行きました。ここはメキシコシティからもそう遠くはなく、多くの観光客が足を運ぶ有名な観光スポットです。この日は何人か体調を崩しており、旅の疲れが出てき始めた頃でしたが、テオティワカンに圧倒され、疲れを忘れるくらい印象に残る観光となりました。

7 日目

7 日目は UAEM の本校に向かい、副学長からの歓迎を受け、UAEM の歴史や建物を見学しました。UAEM の校舎は学校とは思えないほど美しい建物で、観光スポットでもあるそうです。

私たちの海外研修は現地でとても歓迎されており、UAEM 本校の訪問では地元のメディアや新聞などにも取り上げられました。

8 日目

最終日、とても名残惜しい気持ちとともに、UAEM へと向かいました。この日は歯科技工士の指導の下、ワックスアップを体験してきました。日本とは違ったやり方、器具でのワックスアップで、とてもやりやすいと実感しました。日本と違った治療方法や技工方法を体験することができ、とても貴重な体験となりました。

以上がメキシコで経験した大まかな記録です。この貴重な体験を経て、もう一度メキシコに行きたいと思いました。歯科のことだけでなく、文化の違いや言語の違いなど、普段経験することのないことを思い出にできたことは私の財産です。私はもう一度海外研修で行きたい国を選べるならメキシコを選びます。そのくらい文章で表せないほどの経験でした。

最後に、約 1 週間私の家族になってくれたホストファミリーに感謝の意を込めて「Viva México」。





⑤ 本田 莉子

「メキシコでの素晴らしい体験」

今回、海外研修に参加させていただくことができ、とても嬉しかったです。唯一のホームステイがある国だということで、期待に胸を弾ませる一方、自分の英語の能力にも自信がなかったので、ご家族の方と上手くコミュニケーションが取れなかったらどうしようという不安もありました。

いざメキシコに着いてみると、ホストの学生の人たちが私たちの名前の横断幕を抱えて、笑顔で歓迎してくれました。とても感動して、心がほっとしたのを覚えています。その後、空港からの移動中のバスの中でホストの学生の人と隣に座りながら話していた時、初めて会ったとは思えないほど居心地がよく、受け入れてもらえたことがとても嬉しかったです。ホストファミリーにお会いした時も笑顔で抱きしめてくれて、前日まで感じていた不安はどこかに飛び去りました。また、ホストファミリーの親戚の方々とも挨拶をさせていただく機会も多く、人と人との繋がりに深く関わることができて良かったです。

大学を訪問した時は、素晴らしいメキシコのダンスで歓迎してもらい、ホストの学生が行う治療を見学し、また自分たちも治療に参加させていただきました。メキシコでは学生のうちから患者さんを持って、一人で治療を行っていることに驚きました。今回はフッ素塗布を行いました。また、学生たちが道具を自分の工具箱で管理して使っていることにも驚きました。さらに、今までにホストの学生が行った親知らずの抜歯の記録なども見せてもらうことができ、とても良い刺激を受けました。

メキシコのパーティーは、ホストファミリーの親戚の方々もみなさん集まり、とても賑やかで温かいものでした。メキシコでは食事をするときは大人数で食べることが多いと聞き、とても素敵なことだと思いました。観光では、まずオアハカに行きました。そこで一番大きな教会に行き、綺麗な街並みを堪能しました。夕食にはモレという郷土料理を食べました。チョコレートが入ったスパイシーでコクのあるソースで鶏肉を煮た料理で、とても美味しかったです。また、世界遺産であるテオティワカン遺跡にも行き、その迫力と神秘さを肌で感じることができ、感動しました。ツアーのガイドさんが英語で説明をしてくれるのですが、理解するのが難しいときなどは常にホストの学生が説明してくれて、とてもありがたく嬉しかったです。

メキシコ研修での日々は私にとってかけがえのない貴重な経験になりました。メキシコで感じた人と人とのつながりの温かさ、歯学を学ぶもの同士で受けた学びや良い刺激、観光をしながら感じた数々の感動、それらは私の宝物です。私も人に親切にして喜んでもらいたい、もっともっと向上心を持ってたくさんのことを学び、自分の理想とする歯科医師になりたいと改めて強く思いました。今回このような素晴らしい機会をいただけたこと、海外研修に携わってくださった全ての方々に深く感謝しています。ありがとうございました。





北京大学口腔医学院

2023 年 8 月 13 日（日）～8 月 20 日（日）（8 日間）

インストラクター

山 本 信 治 教授（口腔顎顔面外科学分野）

学 生

土 屋 萌 長 塩 桃 佳 濱 崎 奈 央

山 田 耕 大 吉 田 瑞 希



6 北京大学口腔医学院

Peking University School of Stomatology

(1) インストラクター

山本 信治（病態診断治療学講座 口腔顎顔面外科学分野 教授）

「2023 年度北京大学口腔医学院研修報告」

2023 年度北京大学口腔医学院奨励海外研修は、現地での研修は 4 年振りで 2023 年 8 月 13 日～8 月 20 日までの 8 日間行われました。私は北京大学を訪れるのは 2009 年の留学以来 14 年ぶりでしたが、海外研修の引率は初めての経験でした。そのため、学生達の健康と安全、安心して研修を充実させることを第一目標に精一杯サポートを務めるよう心懸けました。今回の 5 名の研修生は語学的には流暢とは言えませんでした。が、北京大学の学生達やインストラクターと、Wechat を利用し交流を深めていました。単なる連絡や会話だけでなく、写真や動画など、学生達なりに努力して積極的にコミュニケーションを図ってくれたと思います。初日、北京国際空港で北京大学のインストラクターと担当学生数人から出迎えを受けました。

2 日目、北京大学口腔医学院を訪問しました。病院の総合受付には多くの患者で混雑していました。院長・副院長ら口腔医学院の幹部に迎えていただき、歓迎式典が行われました。その後、病院の外来見学で各科診療室を訪れ、ここでも患者の多さに驚嘆する一方、設備は最新の機器が備えられ、最先端の口腔医学を世界に精力的に発信している大学であると改めて認識しました。夕方には副院長主催の歓迎懇親会を行なっていただき、口腔医学院の先生方、担当学生達が気さくに話しかけてくれ、次第に打ち解けていくことが出来ました。

3 日目、午前は総合診療科の講演・見学、午後は頤和園、北京大学本部キャンパスを訪問しました。

4 日目、午前は口腔外科の講演・外来見学、午後は故宮博物院を訪問しました。

5 日目、午前は PDI に移動し VR 実習の体験をさせていただきました。実習室は最新の VR 機器が整備され、実習用モニターなど臨床実習前の教育が充実しており、学生にとって最も有意義な研修になったと皆が感想を述べていました。午後は中国雑技団を訪問しました。

6 日目、午前は研修修了式が行われ研修修了証を受け取りました。午後は万里の長城を訪問しました。晩には学生交流会が行われ、日中の歌謡曲の歌、出し物、ゲームで大いに盛り上

がりました。学生達同士、言葉の壁を越えた深い交流ができました。

7日目、ユニバーサル・スタジオ北京を訪問。

8日目、羽田空港到着、解散し研修修了となりました。

最後に、今回貴重な研修の引率者として派遣させて頂きました宮田 淳理事長、中畠裕学長、引率者として私を選出してくださった坂 英樹教務部長をはじめ、大学関係者に深く感謝申し上げます。



(2) 学 生 5 名

① 土屋 萌

「熱烈大歓迎！！」

中国で過ごした 8 日間はまさにこの言葉がふさわしく、北京大学の皆様には温かく手厚いおもてなしをいただき、感謝の念に堪えません。毎日が充実していて、貴重な体験をたくさんさせていただきました。北京大学の方々が日本にいらした時には、それ以上におもてなしをし、ぜひ日本を満喫してほしいです。

北京での日々は、午前中は北京大学口腔医学院の見学や講義、午後は観光というスケジュールで、すべて英語で会話をしました。北京大学口腔医学院は 14 階建てのとても科大学病院で、1 日の平均外来患者数は 2500 人以上、年間外来患者数は 80 万人以上とのことで、私はこれほど大きな歯科病院を初めて見ました。エントランスには所属している歯科医師の名前と顔写真、初診料が記載されており、診てもらいたいと思う歯科医師を患者さん自身で決めます。初診料は教授、准教授、講師で異なり、教授が最も高いですが、その分技術が確かであることから人気だそうです。先生ごとに個室の診療室や専用のユニットがあり、日本の歯科システムとは違って興味深かったです。すべてのユニットにはモニターが設置されていて、そこにレントゲン写真が映されたり、カルテは電子カルテであったりと、電子化が進んでいました。また、バキュームの隣に光照射器が設置されているユニットもあり、おもしろかったです。

北京大学歯学部は 5 年制で、5 年生で病院での臨床実習を行います。そして実際に患者さんを受け持ち診療します。2 人 1 組になって医師とアシスタントに分かれ、医師の学生は実際に患者さんを医療面接して診断し、治療計画を立案し、患者さんのアポイントメントを取って治療をするのです。翌日になると医師役とアシスタント役を交代して診療します。科によって異なると思いますが、学生は 1 日で 5～6 人の患者さんを診るそうです。北京大学口腔医学院の口腔外科を見学させていただいたときは、学生が抜歯を行っていました。器具準備、表面麻酔、浸潤麻酔、歯周靱帯の切除、挺子による歯の脱臼、抜歯鉗子による歯の除去、搔爬、止血、縫合まで、指導者である歯科医師の先生が学生たちにその都度アドバイスをされていましたが、処置はすべて学生が行っており、とても驚きました。同じ 5 年生ですが、私は治療手順や使用器具などが曖昧なものが多いので、北京大学の学生の皆さんに感銘を受

けました。彼らのように自分が治療することを想定し、先生方が行う処置を注視して考えながら臨床実習に臨みたいのです。

また、中国で開発されたバーチャルシミュレーションシステムを体験させていただきました。これはさまざまな年齢、性別、症状の仮想患者を用いたシミュレーション実習で、医療面接や支台歯形成、う蝕治療、根管治療、プロービング、抜歯、インプラント埋入などを練習できます。支台歯形成では、バーチャルなのにエナメル質の硬さや舌の柔らかさを感じ、驚きました。模型や器具は必要なく、何度でも練習でき、記録が残るためいつでも確認できるので、とても便利だと思います。臨床実習に臨む前にプロービング圧や根管治療の感触を学べるのも魅力的です。ぜひ日本にも導入してほしいと思いました。

観光では、動物園や故宮、中国雑技団、万里の長城、ユニバーサル・スタジオ・北京など、毎日さまざまな所を案内していただきました。一度は訪れてみたいと思っていたので、嬉しかったです。食事はミシュランレストランや伝統のあるお店で毎日お腹いっぱいいただき、暑い日中はアイスやドリンクをごちそうになりました。また、私たち一人ひとりにお土産をたくさんプレゼントしてくださいました。非常に手厚いおもてなしをいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、このような貴重な経験をさせていただいた北京大学口腔医学院、明海大学、朝日大学、関係者の皆様に深く感謝いたします。





②長塩 桃佳

「北京での8日間」

海外研修に参加し北京で過ごした8日間は、私にとって大変貴重な経験となりました。海外研修に応募した時は、参加することができるとは思っていなかったので、派遣候補者選ばれた時はとても驚きました。出発前は楽しい気持ちと不安な気持ちでいっぱいでした。

13日の午後、北京空港に到着すると、北京大学の学生たちが到着ゲートで歓迎してくれました。その後、バスで移動している際に学生たちがたくさん話しかけてくれました。しかし私は英語を聞き取ることも話すことも難しく、英語力の無さを痛感しました。日が経つにつれ少しずつ会話ができるようになりましたが、英語でもっと会話できるようになりたいと終始思いました。

北京大学病院は14階建てでとても広く、大きな病院でした。1階は放射線科、2階は歯科補綴科、3階は歯内療法科、4階は矯正歯科、5階は歯周病科と小児歯科、6階は総合歯科、7階は歯科インプラント科、8階は口腔顔面外科、9階は麻酔科、10階は滅菌センター、11階から14階は入院病棟でした。大学病院では、北京大学病院総合科についての説明や矯正歯科と口腔顔面外科の講義を受講したり、病院内を見学したりしました。日本では保険診療はどの歯科医師でも同額ですが、中国の治療費は担当する歯科医師によって異なることを知りました。総合歯科では学生が実際に診療を行っているところを見学しました。治療をすべて学生が行い、先生はアドバイスを少しするくらいでした。私たちと同じ学生が自ら治療を行っているのを見た時は、大変驚きました。北京大学の学生たちとの知識や技術の差を感じました。

また、大学病院においてバーチャルシミュレーションの体験をしました。歯列模型やバー類は一切使わず、口腔内が映し出された画面を見ながらタービンとミラーに見立てたペンのような道具を握って、画面上に表示されているバー類を選択して支台歯形成を行いました。ミラーで舌や頬粘膜を触てみると、本当にそこに存在しているかのような感覚がありました。タービンの音も聞こえるので、実際に歯を削っているようでした。この機器は支台歯形成の練習だけでなく、プロービング検査やスケーリング、インプラント体の埋入、ブラケットの装着、医療面接などあらゆる歯科治療の練習もできるそうです。その他、VRゴーグルを着用して使用する機器もありました。

病院以外にも、さまざまな観光地を案内していただきました。私はパンダが大好きなので、動物園でパンダを見ることができてとても嬉しかったです。頤和園、北京大学、紫禁城、雍和宮、万里の長城などを訪れ、中国の歴史や文化を学ぶことができました。北京オリンピックの会場や北京大学、ユニバーサルスタジオ北京などにも訪れ、雑技団の鑑賞もしました。人生で一度は訪れてみたかったところに行くことができたので、とても満足しています。

食事は毎日中華料理のお店に連れて行ってもらいました。食べきれないほどたくさんの料理が出てきて、今まで口にしたことのないようなものもたくさんありました。本場の北京ダックを食べることができて嬉しかったです。北京ダックの解体ショーやカンフー麵のパフォーマンスも間近で見ることができました。

初めて中国を訪れて北京で過ごした日々はとても充実していて、私にとって人生の大きな財産となりました。今後の歯科医師人生に今回の経験を活かしていけたら良いなと思っています。本研修に携わってくださったすべての方々に感謝いたします。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。





③ 濱崎 奈央

「中国の文化と歯科医療に触れて」

私は今回初めて中国へ行きました。出発前は、研修が始まることに対するワクワクと不安で眠れませんでした。羽田空港付近で前泊し、翌日の昼過ぎに日本を飛び立ちました。北京国際空港で北京大学の学生が「ようこそ北京へ」というボードを持って歓迎してくれました。北京大学の学生とは英語で会話をし、親睦を深めました。最初に会話したのは移動のバスの中でした。北京大学の学生は英語が流暢で、次から次へと質問などをしてくれましたが、友達と二人で力を合わせて聞き取るのがやっとで、自分たちの英語能力不足を痛感しました。

8 日間でさまざまなところを案内してくれました。まず、動物園に行きました。そこではパンダを見ることができました。パンダは 11 匹もいましたが、展示の前はものすごい人で、パンダの展示を見るためのゲートへの行列もすごかったです。昼食や夕食にはさまざまな中華料理を食べに連れて行ってくれました。回転する円卓に次々と料理が運ばれてきて、北京ダックや大きな川魚など中国ならではの食材が使われていました。また、お茶が甘かったり、中国と日本の文化の違いを体感しました。さらに、中国では冷たい水が身体に良くないという考えから、基本的に温かい水しか飲まないということにも驚きました。

中国に着いた翌日から北京大学の病院見学をさせてもらいました。北京大学病院は 14 階まであり、とても大きな病院で、病院内は受診待ちをしている患者さんであふれていました。病院の入り口付近には勤務する歯科医師の顔写真が掲示されていて、隣には治療費が書かれていました。私は山本教授からこの話を聞いていて、「まさかそんなはずはないだろう」と信じていませんでしたが、実際に自分の目で確かめることができ良かったです。また、私たちの学校と同じようにドクターに混じって学生も病院で働いていましたが、学生が実際に診療を行っていることに驚きました。学生の診療にドクターは少ししかアドバイスせず、とても責任重大だと思いました。

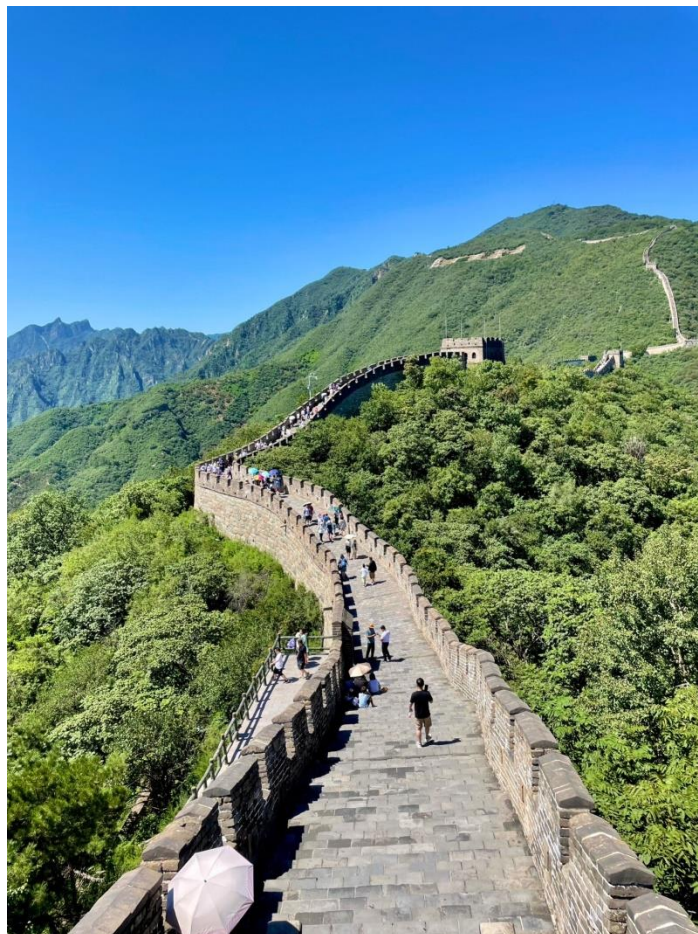
私が病院見学で最も驚いたのが、最新鋭の VR 機器を使用した授業でした。VR 機器を使用してインプラントを埋入したり、支台歯形成をすることができ、使用中は実際に歯を触っている感覚もあって、とてもリアルでした。北京大学に行く前は「中国より日本の歯科医療のほうが発展しているだろう」と思っていたのですが、それは間違いでした。中国での診療の価格も日本と大きな差があり、例えばインプラントの価格は日本が一本約 60 万円に対して、

中国は約 16 万円と三分の一以下でした。また、自分が診療してほしい歯科医師によって価格も異なり、学生に診療してもらう場合は無料とのことでした。

世界遺産など、多くの観光地にも連れて行ってくれました。万里の長城は想像以上に大きく、道も険しかったです。中国の王族のお城などにも行きましたが、中国は国土が大きいためか、どれもスケールが大きすぎて驚きました。同時に、日本では絶対に見られないだろうと思いました。

私たちの海外研修がとても充実した素晴らしい思い出となったのは、北京大学の方々の温かいおもてなしのおかげです。感謝してもしきれないほどの贈り物もいただきました。北京大学の方々が 11 月に日本に来る際には、私たちがしていただいた以上のおもてなしをしたいと思います。

今回の研修は短い期間でしたが、とても貴重で濃厚な経験をさせていただきました。中国の歯科医療を実際に肌で感じ、日本との歯科医療の違いを理解することができました。この 8 日間で学んだことは、私の人生において大きな財産となり、今後の人生に生かしていきたいと思います。このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。





④ 山田 耕大

「中国での歯科医療、教育、文化について」

私は8月13日から8月20日までの8日間、中国の北京大学口腔医学院に研修へ行ってきました。8日間というとても短い期間でしたが、とても実りのある研修となりました。改めて今回の研修に参加できたことをとても嬉しく思います。

12日に羽田空港近くのホテルにて前泊をし、朝日大学の学生たちと顔合わせをしました。今回の研修は、コロナウイルスの影響により2019年以来の北京大学への海外研修でした。前日の時点ではスケジュールなどがまったくわからず、不安があったことを覚えています。しかし、それと同時に大きな期待もありました。

13日の5時ごろ、北京空港に到着しました。空港内に電車が走行しており、中国という国の規模の大きさをさっそく感じました。その後、北京大学の学生たちと合流しました。彼らは全員英語が堪能で、積極的に私たちとコミュニケーションをとろうとしてくれたのがとてもありがたく思うと同時に、自分の英語力のなさを痛感しました。

翌日から北京大学での本格的な研修が始まりました。基本的なスケジュールは、午前中に病院見学、午後に観光でした。

病院見学では、文化、歯科医療、教育における両国間のさまざまな違いを感じました。まず感じたのは人の多さです。とても人が多いため、エレベーターはひっきりなしに動き、一台のエレベーターにもたくさんの人が乗っていました。患者が多ければ歯科医師の数も多く、受付にあるドクターの顔写真がとても多かったことを覚えています。診療室の形態も異なっており、日本では一つの大きな診療室に複数のチェアがありますが、北京大学口腔医学院ではドクター1人に対し1つの診療室が与えられていました。ドクターと患者との距離も近く、治療後にドクターと患者が熱心に話している光景が多く見られました。

歯科教育に関しては、5年生が患者を持ち、自分で治療計画を立て、治療を行っている姿が印象的でした。1人の学生が患者を治療し、もう1人の学生がアシストを行い、治療後に先生がチェックしていました。皆、当たり前のように治療をしていましたが、話を聞いてみるとやはり緊張はすると言っていました。しかし、1つの科に対し2週間しか回れないので、毎回集中して行っているとも聞きました。また、バーチャルでの実習も体験しました。上顎中切歯の支台歯形成を体験しました。自分で削ったガイドグループの形通りに手に抵抗が伝

わってくることや、頬粘膜をミラーで引っ張る感覚が本当にリアルで驚きました。支台歯形成だけでなく、インプラントの埋入や抜歯、さらには医療面接もバーチャルで行えるのです。北京大学でも最近始めたことらしく、最新技術を取り入れる姿勢も素晴らしいと感じました。

また、治療で驚いた内容はドライアイの患者に対し、顎下腺を側頭部に移植し、唾液を涙の代わりに分泌させてドライアイの治療をする方法でした。治療内容にも驚きましたが、ドライアイの治療を歯科医師が行うことにも衝撃を受けました。

観光では北京動物園、万里の長城やユニバーサルスタジオを訪れました。どの場所も中国のとてつもない歴史や文化を感じることができ、とても感動しました。さらに、案内してくれた学生の解説を聞いていると、彼らが自分の国に大きな誇りを持っていると感じました。

食事に関してはどの料理もおいしかったです。中でも、北京ダックや水餃子が私たちにもなじみ深かったです。北京では果物がとても安く売られており、味も日本のものと並みか、もしくはそれ以上でした。

今回の研修は私の人生においてとても意味のある経験になりました。多くの目標ができました。英語をもっと話せるようになること、早く歯科医師になって患者の助けになりたいこと、もっと多くの海外に行きたいと思うようになりました。いつかまた北京に行きたいと思っています。



⑤ 吉田 瑞希

「北京大学で学んだこと」

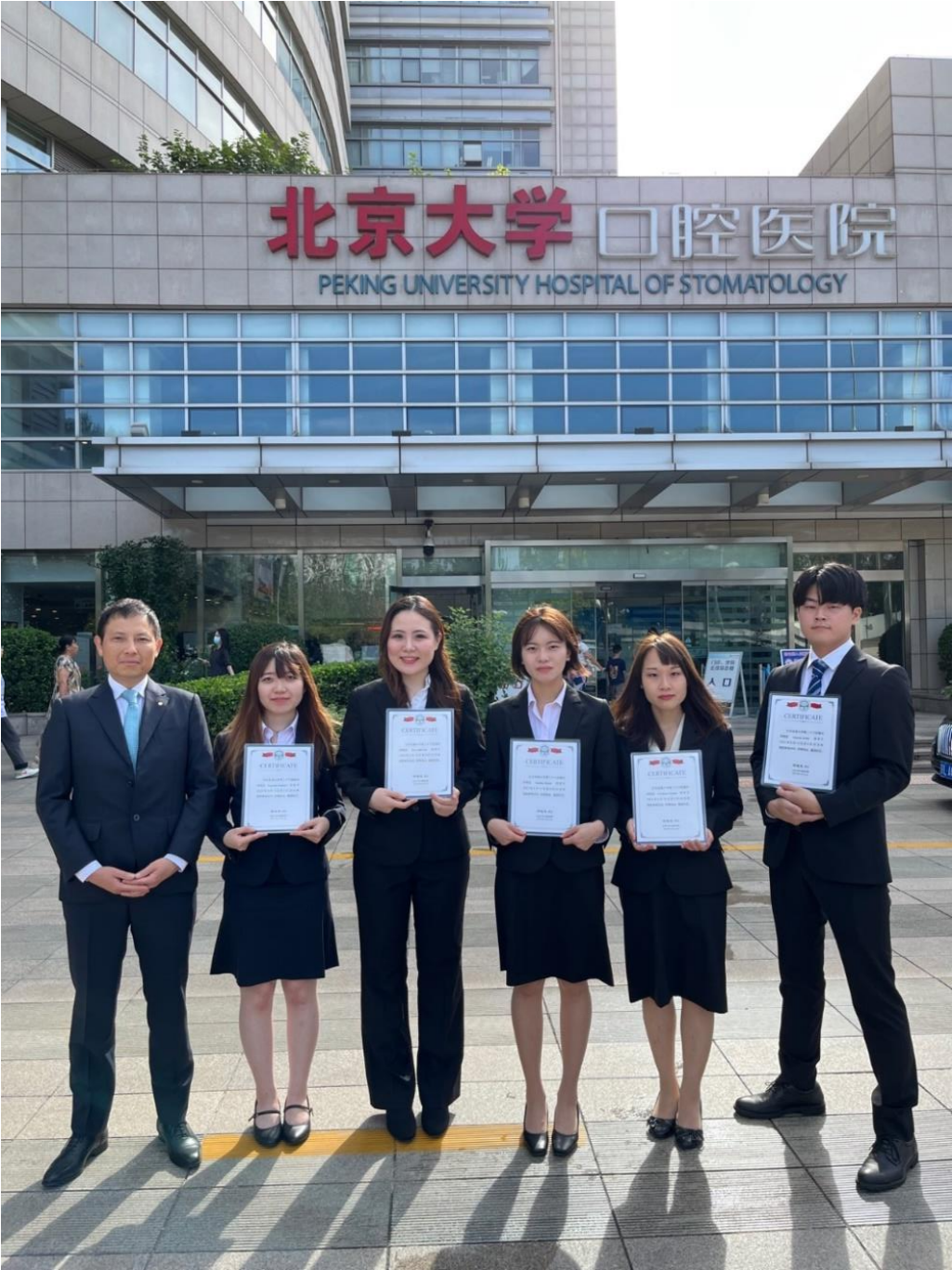
8日間の北京大学での研修はとても充実した時間であり、毎日が驚きと学びの連続でした。北京大学口腔医学院はとても規模が大きく、毎日たくさんの患者が来院していました。14階まで診療室などがあり、6階では私たちと同じ5年生の学生が2人1組になり、患者に対してう蝕処置や歯周基本治療など実際に治療を行っていました。治療が終わったら先生からチェックを受けていましたが、先生はあまり手を加えることはなく、学生がすべて治療しているに等しかったです。私は案内してくれた学生に「患者に実際に治療することは緊張しませんか」と質問したところ、「教科書で学んだことを実践できる機会はそう多くないから、治療できる機会を成長するチャンスだと思っている」という返答をもらいました。私も実習をしていますが、目の前のことに手一杯になってしまい、実習を自分自身の成長につなげるチャンスだと考える余裕はありませんでした。しかし、毎日の実習を成長のチャンスと意識することが大切だということに気が付きました。私が患者の医療面接や先生たちのアシストにつくのがやっとできるようになったと言い切れない今、北京大学の学生たちは実際に治療を行っていることをはじめ、患者に向き合う姿勢、歯科医師になるという責任感、歯科医師国家試験に合格することは当たり前という認識、すべてにおいて彼らと私には大きな差を感じました。日本とは異なるハイレベルな世界を見て彼らを尊敬するとともに、自分に甘えることなく意識高く日々を過ごさないといけないと痛感しました。また、北京大学歯学部は歯科医師国家試験合格後、全員が大学院へ進学し博士号を取得するという話を聞き、歯科医師になるだけでなく更なる高みを目指すという点からも、歯科医療に対する熱意を感じました。

他にも、口腔外科の講義ではドライアイの患者の涙腺に顎下腺を移植して涙の分泌を可能にするという症例を見て、日本にはない治療法が存在することや、涙腺の手術を口腔外科医が行っていることに驚きました。また、VR機器を用いた支台歯形成の実習も行いました。模型を使わずに映像の中に口腔内があり、専用のタービン用のものを操作することで支台歯形成やう蝕除去、インプラント埋入など様々な歯科治療の練習ができました。歯も頬粘膜も存在していないのに切削している振動や感覚が手に伝わってきて、力の入れ具合で切削量も変わり、本物の歯に対して支台歯形成をしているようでした。模型を必要とせず、何度も反復練習できる点がとても良いと感じました。日本ではできない貴重な体験ができました。

8 日間の中で、北京動物園・頤和園・故宮・ラマ寺院・孔子廟・万里の長城・ユニバーサルスタジオなど、たくさんの観光地や歴史的な名所に連れて行ってもらいました。どの場所も日本と比べて敷地が広く、安置されている仏像のサイズも大きく、迫力がありました。特に世界遺産である万里の長城は見渡す限り壁が連なっていて、その壮大さにとても感動しました。もっと中国の歴史について知識があれば、有意義な時間を過ごせたのではないかと思います。2 年前に完成したばかりのユニバーサルスタジオには日本にはないアトラクションがあり、とても楽しかったです。また、本場の中華料理もこの研修中の楽しみの 1 つでした。北京は中国でトップの美食地であると言われています。回転する円卓にたくさんの豪華な料理が並べられており、その品数の多さに驚きました。毎食とても美味しかったです。

北京での研修がとても充実し、素晴らしい時間を過ごせたと思えるのは、この研修に関わってくださった北京大学の全ての方々のおかげです。気持ちのこもったおもてなしが心に沁みました。他のどこでも得ることのできない経験をさせていただいたと思うので、これを糧に自分の人生をより良くしていきたい。この素晴らしい機会を与えてくださった大学及び関係者の方々に深く感謝いたします。





空軍軍医大学口腔医学院

2023年8月20日（日）～8月27日（日）（8日間）

インストラクター 佐藤 慶太郎 准教授（薬理学分野）

学 生 宇津木 真凜 中 里 恵 野 原 みづき

三 谷 和可奈 柳 町 海 斗



空軍軍醫大學（第四軍醫大學）

7 空軍軍医大学(第四軍医大学)口腔医学院

The Fourth Military Medical University

(1) インストラクター

佐藤 慶太郎（病態診断治療学講座 薬理学分野 准教授）

「古都西安で過ごした素晴らしい8日間」

紀元前 11 世紀以降、約 2,000 年に渡り数々の王朝の都として栄えた古都、西安。この地に構える空軍軍医大学口腔医学院で、奨学海外研修が 2023 年 8 月 20 日から 27 日までの 8 日間にわたり実施されました。

訪れた空軍軍医大学の歯学教育施設では、最新の技術を駆使した臨床トレーニング環境に驚かされました。1 台 500 万円を超えるニッシン社製のバーチャルリアリティー（VR）デンタルトレーナー Simodont が 20 台近くも備えられている部屋へ案内され、実際に体験しました。航空シミュレーターで使用されている高度な触覚技術を応用して開発された本装置は、実際の歯に触れているかのような感覚で何度でも繰り返しカリエス除去、支台歯形成、歯内療法などを練習することができます。本研修の後半には明海大学と朝日大学と空軍軍医大学の学生が参加する Clinical Skills Contest が開催されました。上述の Simodont でトレーニングを積んだ空軍軍医大学の学生達の技術は相当に高かったですが、明海大学と朝日大学の学生達も決して引けを取らない成績を収めました。学生達が確かな自信を掴んだ瞬間に立ち会えたことは、大学教員として何よりも嬉しい出来事でした。

ホストを務める空軍軍医大学の教員と学生に案内されて訪れた西安市内とその近郊は、明海大学や朝日大学の学生達はもちろんのこと、私にとっても貴重な経験となりました。世界遺産に登録されている兵馬俑と秦始皇帝陵博物院では、そのスケールの大きさに興奮と好奇心を抑えられませんでした。同様に世界遺産に登録されている大雁塔（慈恩寺）では、三蔵法師がインドから持ち帰った経典とシルクロードの旅路に思いを馳せる時間が得られました。回坊風情街では、シルクロードの起点となる西安ならではのイスラム教の食文化を体験しました。西安と日本の交流の始まりは、西安が長安と呼ばれていた隋唐時代の遣隋使や遣唐使派遣にまで遡ります。1,300 年以上の時を経て実施された本研修を思うと、これまでに紡がれてきた絆の深さに心が震えます。

異なる背景を持つ空軍軍医大学の学生達との交流は、明海大学と朝日大学の学生達の今後の人生に大きな影響を与えたと思います。この8日間は、共感を重ねながら双方の知識や経験を伝え合いグローバルな感覚を掴む最良の環境でした。学生達はミニレクチャー受講や病院見学、研究に関する相互討論を通じて大いに刺激を受け、自身の可能性を再発見する機会を得ました。さらには、新たな興味や視点を見つけ、国際的な側面からも成長できる「伸びしろ」が生まれたと私は信じています。

本研修は修了しましたが、その影響は今後も波及し続けます。学生達は、得られた数々の経験を胸に未来へと羽ばたいていきます。インストラクターとして本研修に携わった私も、西安での素晴らしい8日間を胸に彼らの思い描く未来を応援し続けます。本研修に参加させていただき、誠にありがとうございました。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



(2) 学 生 5 名

① 宇津木 真凜

「異文化交流を通じて学んだこと」

西安での 8 日間は私にとって忘れられない貴重な経験となり、非常に充実した時間を過ごしました。このような機会をいただき、心より感謝の気持ちを伝えたいと思います。私が空軍軍医大学を希望した理由は、普通では体験できない特別な環境で学びたかったからです。大学とはいえ軍の施設であり、そのような場所に日本人が研修に訪れることができるのは、長い間築かれた大学間の信頼関係によるものだと感じています。中国へは初めての訪問で不安や緊張もありましたが、西安空港で空軍軍医大学の先生方や学生の温かい歓迎を受け、すぐにその不安は解消されました。

渡航前、空軍軍医大学の学生や先生方は厳しくて怖いというイメージを抱いていましたが、実際にお会いすると、皆さん非常に優しく親切で面白い方々ばかりでした。食事の際には毎回飲み物を注いでくれたり、食べたい料理を選んでくれたり、観光地では丁寧に説明してくれたり、その気配りには驚きました。彼らの温かい対応を見習いたいと感じました。

大学訪問では、その規模に圧倒されました。広大な敷地内には専門病院がいくつもあり、最新の設備が整った実習室、すべての診療チェアに備えられたマイクロスコープや、インプラント埋入口ロボットなど、初めて見るものがたくさんあり、驚きの連続でした。また、施設だけでなく、待合室に多くの患者さんがいる様子を見て、中国の人口の多さを実感しました。一緒にチェアサイドで診療を行った学生からは、1 人の先生に対して 3 人の学生がつき、医療面接や治療方針を共に考えるという話を聞きました。また、臨床に出る前には、深く学びたい分野を 1 つ選び、その研究を進めて論文を提出するという取り組みがあることを知り、私は少し恥ずかしい気持ちになりました。日本では、毎日のテストに追われることが多かったため、積極的に研究したいという思いを持っていたことはありませんでした。中国の学生たちと交流する中で、帰国後は受け身の学習ではなく、積極的に学びを深めたいという気持ちが強くなりました。

また、西安では多くの観光地にも足を運びました。兵馬俑や華清池、大慈恩寺、城壁など、素晴らしい場所を見学し、毎日が充実していました。特に印象に残ったのは、兵馬俑と夜に観覧したシルクロードの劇です。兵馬俑は長年訪れたかった場所で、実際に目の前で見るこ

とができ、発掘現場や修復途中のものを見られたことがとても楽しかったです。シルクロードの劇では、本物のラクダや狼が登場し、言葉がわからなくても楽しめました。

8日間という短い期間ではありましたが、大学見学や支台歯形成大会、そして西安の観光など、毎日が非常に充実していました。この研修を共にした朝日大学の学生や空軍軍医大学の学生たちは、共に将来の目標を持つ仲間です。この貴重な出会いに感謝し、残りの学生生活も大切にして頑張りたいと思います。この経験を生かし、目指すべき歯科医師になるために、さらに努力を重ねていきたいと強く思いました。





②中里 恵

「8日間の海外研修 in 西安」

私は8日間、中国・西安での海外研修に参加し、空軍軍医大学にて歯科医療を学ぶとともに、西安の豊かな食文化と歴史に触れてきました。

初めての中国渡航に不安を感じていましたが、西安咸陽国際空港に到着すると、空軍軍医大学の先生と学生たちが温かく出迎えてくださり、ほっと胸をなでおろしました。空港を出ると、車やバイク、人々の活気にあふれる街の様子に圧倒され、異国の地に来たことを実感。夜の街並みは日本とはまったく異なり、その景色に目を奪われました。初日の夜は本場の中華料理をいただきながら名刺交換をしたり、日本文化について語り合ったりと、打ち解けた雰囲気の中で交流を深めることができました。

研修2日目・3日目・6日目には空軍軍医大学を訪問しました。

2日目には、歯学教育センターや国際口腔医学博物館、デジタル歯科センター、軍事口腔病学の研究室を見学しました。なかでも印象的だったのは、VR技術を用いた支台歯形成のトレーニング機器です。形状を自由に選び、繰り返し練習でき、形成後にはスコアが表示されるという優れたシステムに、学びの可能性の広がりを感じました。

国際口腔医学博物館では、古くから続く中国の口腔医療の歴史に触れることができました。歯髓の不活性化、アマルガム充填、口唇裂の修復、歯の再植術、毛髪で作られた歯ブラシなど、中国の貢献を示す資料や器具が数多く展示されていました。ブローネマルク博士に関する資料や、各国の口腔保健に関するポストカードの展示も印象的でした。

デジタル歯科センターでは、ロボットによるインプラント埋入やフェイススキャナーといった先進技術に触れ、歯科医療の進歩に驚かされました。軍事口腔病学の研究施設は広大で、多くの研究室が活発に活動しており、そのスケールに圧倒されました。

3日目には大学付属の口腔医院を見学し、一般歯科や救急科など様々な診療室を巡りました。中でも、学生が実際に患者を診療している様子は印象深く、堂々と治療にあたる姿に刺激を受けました。午後にはペアでの臨床見学があり、私は支台歯形成の診療を見学しました。軍人の患者が来た際、優先的に対応していた点も印象に残っています。

6日目はクリニカルスキルコンテストとパーティーの日でした。テーマは「二級窩洞の形成」で、慣れない内容に戸惑いながらも、全力を尽くして取り組みました。夜のパーティーでは、歌やダンス、楽器演奏などを通して交流が深まり、国を超えたつながりを感じた心温

まる時間となりました。

観光も充実しており、4・5・7日目にはさまざまな名所を巡りました。

4日目には兵馬俑、華清池、Camel Bells Legend Show を観覧。特に Camel Bells Legend Show は、シルクロードの歴史をダイナミックに描いたミュージカルで、本物のラクダやオオカミが登場するなど、壮大な演出に圧倒されました。

5日目は西安碑林博物館や書院門文化街、大雁塔、大唐不夜城などを巡り、世界的にも知られる大雁塔を訪れることができたのは大きな喜びでした。

7日目は西安市壁、西安鐘楼、西安鼓楼、そして回民街を訪れました。回民街では、イスラム文化が色濃く残る独特の街並みの中で、羊肉のスープにパンをちぎって入れる「羊肉泡膜」を体験。最初はパンだけ出されて戸惑いましたが、皆でちぎって入れる時間も含めて、良い思い出になりました。

この8日間の研修を通じて、私は日本にいただけでは得られない多くの学びと気づきを得ることができました。この貴重な機会を作ってくくださったすべての方々に、心から感謝申し上げます。この経験を胸に、今後も精進してまいります。





③ 野原 みづき

「中国の文化と歯科医療の現状」

海外研修先が中国の空軍軍医大学に決まったとき、私はさまざまな不安を抱えていました。公衆衛生や治安、日本と中国の政治的な関係など、気がかりな点が多かったからです。そこで、インターネットや先輩方が残してくださった資料をたくさん読み、できる限り準備を整え、多くのことを学んで帰ってこようと心に決めました。

中国に到着したのは夜の9時を過ぎていたため、ホストの学生はいないだろうと思っていました。ところが、空港の到着ロビーには多くの空軍軍医大学の方々が迎えに来てくださっており、その温かい歓迎に驚きました。彼らは滞在中ずっと親切に接してくださり、私たちが快適に過ごせるよう常に声をかけてくれたり、困りごとはないかと気にかけてくれたり、とても心強く感じました。空軍関係の方々なので厳格な印象を抱いていましたが、私たちの拙い英語にも一生懸命耳を傾けてくださり、本当に優しい方ばかりでした。

大学内には博物館があり、動物の標本や骨、歯などが数多く展示されていて、その資料の豊富さは大学の域を超えるものでした。日本ではなかなか見ることのできない年代別のデンタルチェアや、かつて使用されていた歯科器具も展示されており、歯科医療の歴史を肌で感じることができました。また、バーチャルで支台歯形成を行う機械などもあり、学生たちは積極的に手を動かしながらトレーニングを重ねている様子でした。

最終日の前日には Clinical Skill Contest が行われ、上顎前歯の全部被覆冠の支台歯形成と、下顎臼歯部の二級窩洞形成を体験しました。大学内には、バーチャル実習用の機器にとどまらず、研究機器や専用スペースも充実しており、最新の設備が積極的に導入され、常に新しいことに取り組める環境が整っていました。学生たちによる研究発表会にも参加させていただきましたが、彼らは目的や目標を明確に持って研究に取り組んでおり、教科書の学習で精一杯の私にとって、その姿は大きな刺激となりました。将来に対する考え方そのものが、根本的に異なっているように感じました。

西安での滞在中には、総合歯科・救急科での臨床現場を見学する機会もありました。ある先生の治療を見学していた際、一人の患者さんが治療チェアに座っていたのですが、後から来た軍人の方が先生に声をかけると、先生はその軍人の方を先に診療されました。このとき、空軍軍医大学では軍人の治療が優先されるという方針を知り、国や大学の文化の違いを実感

しました。

治療後に先生とお話しする機会があり、「何年間、口腔医学を学んでいますか？」と尋ねられました。学年ではなく、学び続けてきた“年数”を問われたことに戸惑いましたが、先生は「私は 15 年間学んでいます」とおっしゃいました。その言葉から、歯科医師は国家資格を取得した後も日々研鑽を積み、学び続けていく職業であることを改めて実感しました。私は、大学をストレートに卒業し、国家試験に合格することを目標としていますが、今回出会った学生たちは歯科医師になることを前提としながら、その先にどのような歯科医師になるかまでを見据えて学んでおり、その姿勢に強く刺激を受けました。

今回の研修を通して、日常では決して得られないような貴重な経験をすることができました。本や話だけでは決して理解できなかったことを、現地で体感し、学ぶことができたこの機会を、将来、歯科医師として歩んでいく中でも大切に活かしていきたいと思います。





④ 三谷 和可奈

「驚きと感動」

私はこの海外研修で初めて中国の地を踏みました。8 日間の滞在中、驚きと感動が絶え間なく続きました。

歯科に関しては、空軍軍医大学の設備、学生たちの教育熱心さ、そして日本との歯科治療の違いに驚きを隠せませんでした。広大な大学の敷地には、講義室や実習室、実験室が点在し、自由に技工ができる研究室も完備されていました。特に、原子顕微鏡や電子顕微鏡を駆使した研究室、そして材料の物性を調べるために実弾の威力を再現する圧縮砲など、軍医大学ならではのユニークな施設が並んでいました。3D スキャナーや積層プリンターも活用されており、軍医大学の学生がこれらの設備を実際に操作しながら、英語で説明してくれる様子には圧倒されました。加えて、学生たちが自ら推進する研究を発表する場にも恵まれました。培養細胞を用いた骨再生研究やがん研究、さらには歯の再生に関する研究など、どれも非常に興味深いものでした。日本の歯科大学では、学生時代にここまで深い研究に触れることはなかなかないため、中国の歯学教育の違いを強く感じました。特に、軍医大学では歯科技術の研鑽に力を入れており、私たちも VR シミュレーターを使って窩洞形成と支台歯形成を体験しました。手指の感覚が驚くほどリアルで、まるで実際に削っているかのようでした。

また、大学病院の診療を見学した際、衛生面とプライバシーへの配慮が非常に徹底されていることにも感動しました。治療に関わるすべての場所が青い抗菌シートで覆われ、患者ごとに取り替えられるなど、清潔感が保たれていました。診療チェアは半個室のように囲まれ、患者のプライバシーを守りながらも安心して治療を受けられる環境が整えられていました。特に、使用していた日本製の CR が、世界中で認められていることを誇りに感じました。

研修を通じて、中国の歴史や文化にも触れることができました。西安はかつての長安であり、数多くの世界遺産を有する歴史的な土地です。兵馬俑の迫力、シルクロードに関連するミュージカル、本物のラクダや狼を使った演出など、驚きの連続でした。また、シルクロードの起点となる西門がある西安古城壁を訪れることができたことも貴重な体験でした。西安の中華料理も、珍しい食材が使われていて、初めて食べる料理ばかりでしたが、どれも非常に美味しく、特に西安ダックが印象に残っています。

現地の人々はとても親切で、例えば、食品店では翻訳機を使って熱心に説明してくれました。時に異なる文化に戸惑うこともありましたが、その都度、軍医大学の学生や先生が親身

に助けられました。このような優しさに触れることで、心温まるひとときを過ごすことができました。

この研修を支えてくださった空軍軍医大学の学生・先生方、共に研修を受けた朝日大学と明海大学の仲間たち、そして健康と安全を守ってくださった引率の先生方に、心から感謝しています。この8日間の貴重な経験を胸に、理想の医師を目指して、これからも積極的に取り組んでいきたいと強く感じています。





⑤ 柳町 海斗

「中国 4000 年の歴史」

私は明海大学の海外研修制度に以前から大きな期待を寄せていました。それは、日本とは異なる歯科医療の現場を自分の目で見て、肌で感じることができるからです。

中国では、国家試験の前に臨床研修を通じて患者さんの治療に携わり、実践を重ねたうえで国家試験を受けるというシステムが取られていました。日本の制度とは大きく異なります。もし今、自分が実際に患者さんの治療を行えるかと問われたら、自信をもって「はい」とは言えません。それだけに、中国の学生たちは高いモチベーションと努力をもって臨床力を培っているのだと感じ、レベルの違いに圧倒されました。

また、空軍軍医大学には、3D メガネを装着して齲蝕治療のシミュレーションができる機器が何台も整備されており、その先進性にも驚かされました。日本では模型に直接処置を行うため、人工歯を都度交換する必要がありますが、中国では何度でも簡単にリアルな感覚で練習でき、しかも自動で採点までされます。このように、中国の教育環境やトレーニングシステムの発展ぶりには目を見張るものがありました。

空軍軍医大学病院では、一般の方も受診に訪れますが、軍人の治療が優先される制度がとられていました。軍人の地位の高さを実感しましたし、戦地でも歯科治療が可能なように、トラック内にユニットを2台搭載した移動式の治療車両も配備されていました。さらに、身体に欠損が生じた場合の補填として、エピテーゼ（人工補綴物）を作成する技術も備えられており、まさに空軍軍医大学ならではの特化した医療環境を体感することができました。このような貴重な施設を訪問できたことは、本研修に参加した大きな意義の一つです。

観光では、華清池や三蔵法師にゆかりのある寺、城壁など、歴史的な名所を巡りましたが、特に印象深かったのは兵馬俑でした。兵馬俑は、秦の始皇帝が死後も守られるようにと馬や兵士の姿で造られた像です。2000 年以上前に作られたとは思えない保存状態で、今なお堂々と立ち並ぶ姿から、始皇帝の権力の大きさとその影響力を強く感じました。西安は歴史的にも非常に奥深い都市で、中国 4000 年の歴史を肌で感じられる貴重な経験となりました。

文化の違いについても多くの学びがありました。一つ目は「午睡（ウーシュイ）」という昼食後の短い睡眠時間の習慣です。午後の活動効率を上げるために、全体として静かになる時間が設けられており、非常に合理的だと感じました。日本でも取り入れてもよい文化だと思います。

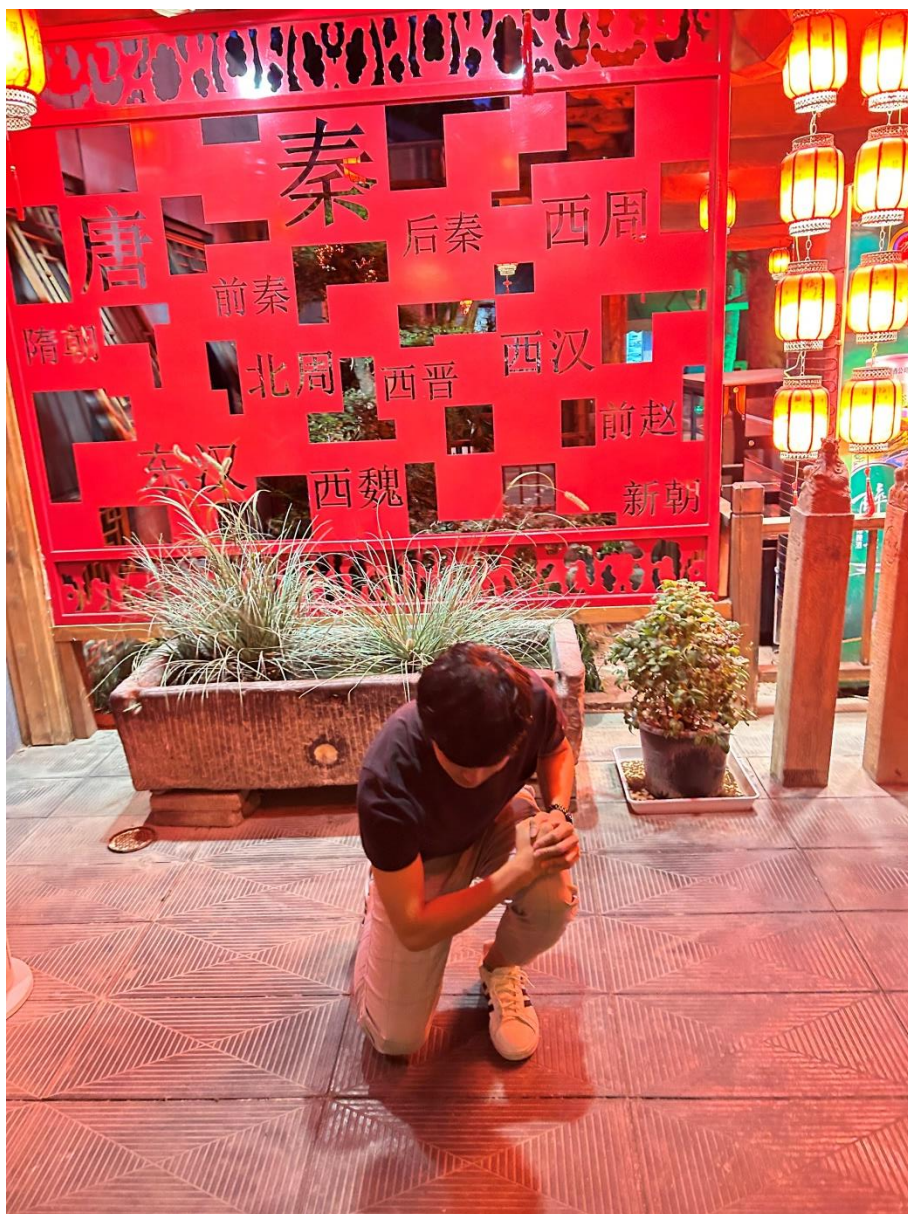
います。二つ目は食事に対する考え方の違いです。日本では出された料理をすべて食べるのが礼儀とされていますが、中国では少し料理を残すことが「満足した」ことを表すマナーであると聞きました。実際、次々と料理が運ばれてくるので、完食するのは困難なほどでした。

研修期間中、ALPS 処理水に関する日本政府からの注意喚起がありましたが、空軍軍医大学の皆様の配慮のおかげで、滞在中は安心して研修に集中することができました。大学の先生方や学生の皆さんは、私たちをととても温かく迎えてくださり、こちらの要望にも常に丁寧に対応してくれました。私の拙い英語も一生懸命聞き取ってくれたことが、とても嬉しかったです。

毎日の食事也非常に豪華で、ターンテーブルに乗り切れないほどの料理が出されました。香辛料が強めの料理や、非常に辛い料理もありましたが、どれもとても美味しく、異文化の食の魅力を堪能しました。

今回の海外研修では、日本と中国の歯科教育や医療体制の違い、そして文化や価値観の多様性に触れることができました。1週間という短い期間でしたが、病院見学に加え、中国の歴史的建造物や世界遺産にも触れられ、とても充実した研修となりました。丁寧に対応くださった空軍軍医大学のスタッフ・先生方・学生の皆様、そして同行した明海大学・朝日大学の先生や学生たちとの出会いに心から感謝しています。今後もこの貴重なご縁を大切に、友好関係を築いていきたいと強く思っています。





トゥルク大学歯学部

2023 年 8 月 18 日 (金)～8 月 25 日 (金) (8 日間)

インストラクター 小 林 真 彦 講師 (高齢者歯科学分野)

学 生 梅 崎 ありさ 葛 山 美優花



Turun yliopisto
University of Turku

8 トゥルク大学歯学部

The institute of Dentistry, University of Turku

(1) インストラクター

小林 真彦（形態機能性育学講座 高齢者歯科学分野 講師）

「トゥルク大学研修報告」

2023 年度トゥルク大学での研修は、2023 年 8 月 18（金）～25（金）まで、8 日間にわたり行われました。

今年度の派遣学生 4 名は、海外経験が少なく、語学やコミュニケーションにおいて特に不安を感じていましたが、研修への意欲は非常に強く、それらの不安は研修がはじまればすぐに解消されるであろうと考えていました。一方で、私は、以前にトゥルク大学へ留学をしていたこと、また、同大学での研修のインストラクターも 2 度目であったことから、多くの仲間に再会できることをとても楽しみに研修初日を迎えることができました。学生の安全を第一に考え、研修の中心は学生であることを念頭に置き、学生の自主性を尊重し、本学および朝日大学の建学の精神である国際未来社会に積極的に関わり、今回の研修にとどまらず将来に繋がる機会となるよう全力でサポートすることをインストラクターの使命として臨みました。

初日、成田国際空港に集合し懇親夕食会を行いました。派遣者全員で WhatsApp を通じて事前に研修に関わる連絡を取り合っていたため、学生たちの研修に対する若干の緊張は感じたものの、すぐに皆が打ち解け合いました。そして、各々の研修への思いを知ることができました。

2 日目、ヘルシンキ・ヴァンター国際空港に無事到着し、トゥルク大学の教員、学生たちから温かい歓迎を受けました。学生たちにとって研修がはじまったと実感したひと時であったと思います。その後、ホテルへ移動した後、ヘルシンキ中心部の美術館へ行き、元老院広場やヘルシンキ大聖堂等の歴史的な街並みを散策し、フィンランドの歴史や文化に触れました。皆それぞれが新たなものに触れ感じるものがあったと思いますが、インストラクターとして強く感じたことは、学生たちの順応性です。生まれ育った国や言語が異なってもお互いを理解しようとする思いがあれば自然とコミュニケーションが成立するということを

実感しました。少なくとも学生たちがお互いの思いを伝え合うのに長い時間は必要ありませんでした。

3 日目、世界遺産のスオメンリンナの要塞を見学し、フィンランド共和国の歴史について学びました。現在の世界情勢からも領土的野心というものはいつの世にも存在するように感じました。その後、トゥルクへ移動しました。

4 日目、トゥルク大学を訪問し、歯学部での研修が開始しました。歓迎会では、歯学部長をはじめ多くの大学関係者の方々からの盛大な歓迎を受け、2006 年から続くトゥルク大学とのパートナーシップの強い結びつきを感じました。そして、このパートナーシップをより強いものにするために、自分に何ができるか、ということを考え努めていきたいと思いました。トゥルク大学の歴史や歯学部のカリキュラムについての講義後、学生たちの自己紹介を行いました。事前に準備したスライドを用いて、それぞれの国や文化、大学生活等の情報を共有しました。学生たちは、人前で発表する緊張感や母国語でない英語で紹介する難しさを感じたのではないのでしょうか。

4～6 日目、歯学部、トゥルク臨床生体材料センター (TCBC)、医学図書館やトゥルク大学付属病院の見学、キシリトールやフィンランド式 Sauna! 等の講義、生体材料 (FRC) のデモ、仮想歯科トレーニングシミュレーター (NISSIN simodont) や第 3 学年学生実習でのハンズオンと充実したプログラムでした。特に、学生たちが関心をもったのはキシリトールについての講義です。キシリトール研究の第一人者であるマキネン教授は、トゥルク大学から研究成果を発表しています。キシリトールの歯の健康に対する有効的な使用方法についても学ぶことができました。その他、日本製の仮想歯科トレーニングシミュレーターが学生実習で使用されていることにも興味を示し、う蝕除去トレーニングでは、皆で競い合い、大いに盛り上がりました。第 3 学年学生と行った CR 修復の実習では、お互いにディスカッションしながら進めることに刺激を受けたようでした。

7 日目、研修修了証書授与式と記念写真撮影会をもって、歯学部での研修が終了しました。ヘルシンキ・ヴァンター国際空港で、トゥルク大学の教員、学生たちの見送りを受け、2024 年、日本で再会する約束をしました。数日間の研修でしたが、共に過ごした仲間と別れる学生たちの姿から、仲間との間に、新たな何か、が形成されたように感じました。

最終日、成田国際空港に無事到着し、学生たちの安心した表情がみられました。COVID-19 後、再開した海外研修において、チームトゥルクは、大きなトラブルもなく研修を終えることが

でき、インストラクターの私も安心しました。インストラクターの使命を果たせたかは不確かですが、学生たちにとってトゥルク大学での研修は、有意義で実りあるものであったと確信しています。歯科という共通のフィールドでフィンランドに大切な仲間ができた学生たちの今回の研修での経験が、将来、国際未来社会で活躍する歯科医師へと繋がってくれるとうれしく思います。

最後にこのような素晴らしい機会を与えてくださった明海大学・朝日大学・トゥルク大学の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



(2) 学 生 2 名

① 梅崎 ありさ

「フィンランドからの温かな心の贈り物」

私は明海大学歯学部 of 交換研修プログラムが非常に活発である点に強く魅力を感じ、入学を決意したと言っても過言ではありません。それほどまでに海外研修への思いが強く、フィンランドのトゥルク大学に派遣されることが決まった際には、心から嬉しく感じ、この経験が自分にとって大きな成長の機会になるだろうと期待しました。貴重な海外研修の機会を得ることができたので、フィンランドやトゥルク大学についての情報を徹底的に調べ、渡航準備を進めました。

8 月 18 日（金）の 23 時ごろ、成田空港を出発し、約 13 時間のフライトを経て、翌 19 日（土）の午前 5 時ごろ、ヘルシンキ・ヴァンター空港に到着しました。早朝にもかかわらず、教授の Mervi 先生、学生の Laura さんと Atte さんが温かく迎えてくださり、心強いスタートを切ることができました。空港からヘルシンキ市内にあるホテルまでのバス移動中、自己紹介をしたり、街の景色について会話をしたりしましたが、思いのほか英語が出てこないことを実感しました。それでも、トゥルク大学の学生たちは私の拙い英語を理解しようと積極的に努めてくれ、そのおかげで心配や不安が和らぎ、積極的にコミュニケーションをとることができました。

現地での初日や 2 日目は首都ヘルシンキで過ごし、世界遺産のスオメンリンナを訪れたり、歴史的な建造物を見学したりしながら、フィンランドの歴史や文化について学ぶことができました。事前に調べていたことを実際に目にすることができ、大きな感動を覚えました。例えば、地震の多い日本では見ることの少ない石造りやレンガで建築された古い建物が多く、ヨーロッパならではの街並みや風景を楽しむことができました。

3 日目からはトゥルク大学歯学部での研修が始まり、講義や実習に参加しました。生体材料の講義では、FRC（繊維強化レジン）を用いた直接法でのブリッジ作製のデモンストレーションを Professor Pekka が行ってくれました。日本ではまだ見かけない歯科材料で、即時にブリッジを必要とする患者様に非常に有用だと感じました。その他にも、世界的に知られる予防歯科のキシリトールに関する講義や、病理学的視点からの口腔カンジダ症に関する講

義を受けました。内容は非常に興味深く、英語で行われる講義も刺激的でした。シムドントを使ってバーチャルで齶蝕の除去を体験したり、現地の3年生とともに顎模型でCR充填を行う実習も体験し、先生と学生の距離が非常に近く、親身に指導をしてくださる環境で学びやすさを感じました。また、学生同士でディスカッションする時間が設けられていることも、非常に有意義でした。

一緒に実習をした学生やホストである学生から直接聞いた印象的なことは、フィンランドと日本の歯科大学のカリキュラムの違いです。日本では5年生から大学病院で臨床実習が始まりますが、フィンランドでは3年生から患者様に対して実際に診療を行うことに驚きました。もちろん、指導教授の厳重な管理の下で、治療の過程を何度も確認しながら進めていきます。そのため、治療の質が確保されつつ、患者様は治療にかかる時間が長くなることがありますが、治療費が約半額で済むため、大学病院で学生による治療を希望する患者様も多いと聞きました。

今回の研修では、歯科に関する内容をはじめ、フィンランドの歴史や文化についても充実したプログラムで素晴らしい体験ができました。特に、フィンランドで人生初のサウナを体験できたことは大きな喜びでした。フィンランドではサウナが伝統的な文化の一部であり、現地の人々の多くがサウナを愛しており、サウナに関する講義まで受けることができました。自然豊かな環境と清らかな空気の中で、現地の人々が見せてくれた心温まる思いやりに触れ、心も体も浄化されるようでした。

この研修を通じて、他国の歯科医療を実際に目にし、学ぶことができただけでなく、他国の人々に対する思いやりや親切の心など、人間としての心のあり方についても改めて考えさせられました。フィンランドからいただいた温かな心のプレゼントに感謝の気持ちを込めて、日本での受け入れの際には、その倍の温かな心を贈りたいと思います。この素晴らしい経験を周りの人々に伝え、人生を豊かにするために、これからもグローバルな視野と感性を持ち続け、理想の歯科医師像に向かって努力していきたいと思います。

最後に、この貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様、研修に参加したすべてのメンバー、そしてトゥルク大学の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。Kiitos!



② 葛山 美優花

「フィンランドで学んだ文化の違いと言語を超えた新たな友情」

私は明海大学歯学部 of 交換研修プログラムが非常に活発である点に強く魅力を感じ、入学を決意したと言っても過言ではありません。それほどまでに海外研修への思いが強く、フィンランドのトゥルク大学に派遣されることが決まった際には、心から嬉しく感じ、この経験が自分にとって大きな成長の機会になるだろうと期待しました。貴重な海外研修の機会を得ることができたので、フィンランドやトゥルク大学についての情報を徹底的に調べ、渡航準備を進めました。

8月18日（金）の23時ごろ、成田空港を出発し、約13時間のフライトを経て、翌19日（土）の午前5時ごろ、ヘルシンキ・ヴァンター空港に到着しました。早朝にもかかわらず、教授の Mervi 先生、学生の Laura さんと Atte さんが温かく迎えてくださり、心強いスタートを切ることができました。空港からヘルシンキ市内にあるホテルまでのバス移動中、自己紹介をしたり、街の景色について会話をしたりしましたが、思いのほか英語が出てこないことを実感しました。それでも、トゥルク大学の学生たちは私の拙い英語を理解しようと積極的に努めてくれ、そのおかげで心配や不安が和らぎ、積極的にコミュニケーションをとることができました。

現地での初日や2日目は首都ヘルシンキで過ごし、世界遺産のスオメンリンナを訪れたり、歴史的な建造物を見学したりしながら、フィンランドの歴史や文化について学ぶことができました。事前に調べていたことを実際に目にすることができ、大きな感動を覚えました。例えば、地震の多い日本では見ることの少ない石造りやレンガで建築された古い建物が多く、ヨーロッパならではの街並みや風景を楽しむことができました。

3日目からはトゥルク大学歯学部での研修が始まり、講義や実習に参加しました。生体材料の講義では、FRC（繊維強化レジン）を用いた直接法でのブリッジ作製のデモンストレーションを Professor Pekka が行ってくれました。日本ではまだ見かけない歯科材料で、即時にブリッジを必要とする患者様に非常に有用だと感じました。その他にも、世界的に知られる予防歯科のキシリトールに関する講義や、病理学的視点からの口腔カンジダ症に関する講義を受けました。内容は非常に興味深く、英語で行われる講義も刺激的でした。シムドントを使ってバーチャルで齲蝕の除去を体験したり、現地の3年生とともに顎模型でCR充填を

行う実習も体験し、先生と学生の距離が非常に近く、親身に指導をしてくださる環境で学びやすさを感じました。また、学生同士でディスカッションする時間が設けられていることも、非常に有意義でした。

一緒に実習をした学生やホストである学生から直接聞いた印象的なことは、フィンランドと日本の歯科大学のカリキュラムの違いです。日本では5年生から大学病院で臨床実習が始まりますが、フィンランドでは3年生から患者様に対して実際に診療を行うことに驚きました。もちろん、指導教授の厳重な管理の下で、治療の過程を何度も確認しながら進めていきます。そのため、治療の質が確保されつつ、患者様は治療にかかる時間が長くなるがありますが、治療費が約半額で済むため、大学病院で学生による治療を希望する患者様も多いと聞きました。

今回の研修では、歯科に関する内容をはじめ、フィンランドの歴史や文化についても充実したプログラムで素晴らしい体験ができました。特に、フィンランドで人生初のサウナを体験できたことは大きな喜びでした。フィンランドではサウナが伝統的な文化の一部であり、現地の人々の多くがサウナを愛しており、サウナに関する講義まで受けることができました。自然豊かな環境と清らかな空気の中で、現地の人々が見せてくれた心温まる思いやりに触れ、心も体も浄化されるようでした。

この研修を通じて、他国の歯科医療を実際に目にし、学ぶことができただけでなく、他国の人々に対する思いやりや親切の心など、人間としての心のあり方についても改めて考えさせられました。フィンランドからいただいた温かな心のプレゼントに感謝の気持ちを込めて、日本での受け入れの際には、その倍の温かな心を贈りたいと思います。この素晴らしい経験を周りの人々に伝え、人生を豊かにするために、これからもグローバルな視野と感性を持ち続け、理想の歯科医師像に向かって努力していきたいと思います。

最後に、この貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様、研修に参加したすべてのメンバー、そしてトゥルク大学の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。Kiitos!



シエナ大学歯学部

2024年3月17日(日)～3月24日(日) (8日間)

インストラクター 岸 本 敏 幸 講師 (朝日大学教員)

学 生 熊 耳 優佳里 竹 澤 直 龍



UNIVERSITÀ DEGLI STUDI DI SIENA

9 シエナ大学歯学部

University of Siena

学 生 2 名

① 熊耳 優佳里

「シエナでの学び」

この海外研修は、私が明海大学への進学を決めた大きな理由の一つでした。入学前からずっと参加したいと楽しみにしていて、掲示板で「参加できる」と分かったときの驚きと嬉しさは、今でもはっきりと覚えています。

日本から約 15 時間かけてローマの空港に到着し、乗り継いでフィレンツェ空港に着いたのは深夜 23 時頃でした。時差や長時間の移動で少し不安もありましたが、Tiziana Doldo 先生をはじめ、Ovidio さん、Carlotta さん、Tommaso さんが温かく迎えてくださり、一気に安心したのを覚えています。

研修の前半は、トスカーナ地方のシエナに滞在しました。シエナは町全体が世界遺産に登録されている歴史ある場所で、中世の街並みが美しく残されており、歩いているだけでまるで映画の中にいるような気分になりました。茶色いレンガ色の街並みは「シエナ色」として絵の具にもあるほど独特で、とても印象的でした。

観光では、シエナの代表的なスポットである「シエナ大聖堂」と「カンポ広場」を訪れました。大聖堂の中は白と黒の大理石でできた美しい模様、ステンドグラス、古い聖歌本など、どこを見ても息をのむほどでした。カンポ広場では、毎年夏に伝統的な競馬「パリオ」が行われていて、地元の人たちにとって特別なイベントだということが、話を聞く中でよく伝わってきました。

また、近郊のサンジミニャーノという町にも行きました。かつて貴族たちが競って建てた高い塔が特徴で、今も 14 本が残っています。その景色は中世そのまま、歩くだけで歴史を感じることができます。広場には「世界一おいしい」と言われているジェラート店もあり、実際に食べてみたところ本当に絶品でした！

研修中にはシエナ大学とその大学病院も見学しました。シエナ大学は 1240 年創立のとても歴史ある大学で、授業は英語で行われ、学生たちはとても積極的に発言していました。実

習室にはマネキンやモニターが完備され、図書館もとても充実していました。何よりも、廊下などでも学生たちが真剣に勉強している姿が印象に残り、「自分ももっと頑張ろう」と刺激を受けました。

大学病院では、学生が担当患者を持ち、実際に診療に参加していることを知って驚きました。日本と共通する部分も多い一方で、学生のうちから責任ある立場で実習に関われる点は、とても興味深かったです。

滞在中は毎晩のように夕食を囲んで、現地の先生方や大学関係者の皆さんとお話する機会がありました。ピエトラ総長やマルコ・フェラーリ教授、グランディーニ・シモーネ教授にもお会いでき、歯学についての考え方や文化の違いについて知ることができました。

研修の後半には、フィレンツェにも足を伸ばしました。ウフィツィ美術館では「ヴィーナスの誕生」や「春（プリマヴェーラ）」など、教科書で見たことのある絵画を実際に鑑賞することができ、感動しました。その他にも、ピサの斜塔や有名な教会などを訪れ、イタリアの芸術や歴史を肌で感じることができました。

この研修を通じて、たくさんの学びや出会いがあり、想像以上に充実した時間を過ごすことができました。シエナの人々はとても親切で、街の空気も穏やかで、安心して過ごすことができました。食べ物も美味しく、毎日が新しい発見の連続でした。

来年以降、この研修に参加される皆さんも、ぜひ現地の人とたくさん話し、自分の目でたくさんのことを見て、感じてきてください。言葉に不安がある人もいるかもしれませんが、現地の方はとてもフレンドリーで、身振り手振りやスマートフォンも駆使すれば何とかできます！

最後になりますが、このような素晴らしい機会をくださった宮田理事長をはじめ、大学関係者の皆様、そして温かく迎えてくださったシエナ大学の皆様に、心から感謝申し上げます。この経験を、これからの学生生活や将来の目標にしっかりと活かしていきたいと思います。



② 竹澤 直龍

「最高の思い出と出会い」

イタリアにあるシエナ大学への派遣が決まり、海外研修を通して非常に貴重な経験を積むことができました。このような機会を与えてくださった宮田理事長をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また、イタリアでの海外研修、そして日本での受入が無事に終了したことをご報告いたします。

私がこの奨学海外研修の選考に応募したのは、入学当初から海外研修に強い関心があり、ぜひ参加したいと考えていたからです。幸いにも選考を通過し、シエナ大学での研修が決まりました。シエナ大学には、昨年同じ部活動に所属していた先輩も派遣されており、事前にお話を聞く機会がありました。入学時から抱いていた「海外研修に参加する」という目標を達成できたことを、心から嬉しく思います。

海外研修という貴重な機会をいただき、大学の代表として選ばれたからには、多くのことを吸収し、今後の人生に役立てたいと決意しました。

シエナ大学は1240年に設立された、世界的にも非常に歴史のある大学です。そんな由緒ある大学で歯科治療の現場を見学し、ピエトラ総長、歯学部長のシモーネ・グランディエーニ教授、マルコ・フェラーリ教授らとお会いすることができ、大変光栄でした。

引率としては、昨年に引き続き、ティツィアーナ・ドルド教授が来日してくださいました。受入学生としては、カルロッタ・ガッリさん、トンマーズ・ゴッティさん、そして昨年の交換研修プログラムで来日し、今回もティツィアーナ教授のサポートとして同行してくれたオヴィディオさんが参加してくれました。

彼らは、歴史ある大学やキャンパスでの歯科治療、イタリアの伝統的な街並みなどについて、英語があまり得意でない私にもわかるよう丁寧に説明してくれました。たくさん会話を重ねる中で、私は彼らのおかげでイタリアでの滞在を一生忘れられない最高の時間にすることができました。彼らと築いた友情は今でも続いており、SNSを通じて連絡を取り合っています。

私は今後も、イタリアで築いた交友関係を大切にし、意見交換などを続けていきたいです。

